
グリーンピース

真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンピース

【Nコード】

N7398D

【作者名】

真琴

【あらすじ】

友達がいず、学校でいじめられている香織。そんなある日、麻里という子が「友達になろう」と話しかけてくる。それがきっかけとなり香織は徐々にいじめられなくなり、麻里との仲も深まっていくが……。最初はダークな部分もちょっとだけありますが、後々感動っぽい話になっていきます。

プロローグ

暖かい陽気が心を和ませる春。

そんな季節の、ある太陽が照る朝。

施設の門のところで、一人の男の子が眠っていた。

その子はまだ言葉も満足にしゃべれない文字をまともに書くこともできない、お父さんとお母さんに、まだほとんど何も教えられていない。なのに、門のところで白い毛布にくるまれて男の子は眠っていた。

朝施設の人にその存在を気づかれたとき、男の子は全く悲しそうな表情すら見せず、平然と笑っていた。でも、その笑顔にはぎこちなさがある。今自分がどんな現状に置かれているか分からないであろう男の子にも隠そうとする感情が、気のせいかなんかちうかがえた。

「お名前は？」

施設の人が聞く。

「ゆう」

3才くらいのその男の子はそう言った。

「ゆう、ちゃん？」

「ゆう、ゆういち」

かわいらしい声でそう自分の名前を言う男の子。親指を口で加えながら光った小さな目で話すその子は、あまりにも親と離れるには幼すぎた。

名前しか言葉を知らずにここまで育ったこの子に与えられた最後の愛情。それは白い毛布。男の子の体を包んでいた毛布。そして、その毛布に赤い糸で縫われた「友永祐一」という名前。

「友永、祐一くん……」

施設の人言葉も喉が詰まって出ず、ただ男の子をぎゅっと抱きしめていることしかできなかった

施設に男の子が入ってから太陽と月を入れ替わりを続け、そして10年の時が経った。

彼はもう男の子とは呼べないほど成長し、現在14才。心が育ち複雑に絡み合う年代。

そんな時期彼はずっと前から疑っていた一つのことに確信を持つようになり、やがてあることを実行しようと決意した。それはとても恐ろしく、なのに100%全て悪いと言い切れないほどの繊細さと愛しさがある。間違った行為といってしまうだけでは済まない、戸惑いの決意だった。

プロローグ（後書き）

連載が遅くなることもあるかもしれませんが、
もし気に入っていただけたら幸いです。

第1章 - 1話

6月5日、天気曇り時々雨。

入学してまだ2ヶ月しか経過していない、しかし学校での人間関係はもうすっかり構築されている。なのにその日になってもわたしはいまだ学校になじめず、思えばこんな目に遭ったのも当然といえば当然だったのかもしれない。

上靴に履き替えようと革靴を脱ぎ、脱いだそれを片手で持ってもう一方の手で靴箱をキーツという金属音で開けると中に、紙が入っていた。

こんな経験初めてだったからわたしは変な期待をしながら、二つ折りのその紙を開き見た。

死ね

いきなり目に飛びこんできた2文字の刃。

冗談が飛び交う教室では定番となりつつある言葉が人付き合いほぼゼロのわたしに向けられたことはほとんど無かったけど、そのぶん人より刃の先の鋭さに対しての免疫は乏しかったらしく、重い音をたてて心臓を貫いた。

同時にグサツとした痛みが中心に襲いかかり、すぐにそれはテンポの速い鼓動となって表れた。

何分間か『死ね』の字の意味を分かっているにも受け入れられないでいるうちに、動揺は鈍い違和感を残したまま、粉薬が水といっしょに喉を通るようにして赤い血の巡る全身にサツと溶けた。

……あ、いじめだ。

そのとき、難なく理解できる自分が、そこにいた。

前々から孤独な自分が標的にされる率の高いことを心得ていたのに、今日明日そうなるのもいいように構えていたのに、それでも悲しく

なつて息苦しく、肺が痛んだ。

ここまで理解していてもわたしは紙を素早く最初の形に戻して、さらに四つ折りに、続いて八つ折りにしていた。何かの間違いだと思いたかった。それでなんとか息を整えてもう一度半開きの口で開くと、やっぱりそこには『死ね』と書かれてある。ボールペンで、強く書かれてある。

紙を持つ手が震えた。

唾が喉を通らなかった。

頭は混乱している。かと思えば、意外にも冷静に、自分が見てきた過去を思い返していた。

わたしがいるクラスには、入学して1週間で不登校になった生徒がいて、その子はいじめられていた。カバンをゴミ箱に捨てられ靴を花壇に埋めこまれ上靴に画びょうを入れられトイレで水を頭にかぶせられ、徹底的に潰されてある日学校に来なくなったその子の名前をわたしははつきりと覚えていない。たぶん山か川かどちらかの字が名字にあったと思う。そんな平凡な名前のその子でも、友達がいなければいじめられてしまう。きっとその子はこれからのわたしを映す鏡なのだろう。学校にいる間は常にある恐怖、それと戦う余地もない人だから友達ができないわけであって、学校で誰とも話さず家に帰るわたしはその条件にピッタリ合う。良かった。あの子が先で良かった。

そう思えば、まだ気分は落ち着いていた。

二番目なのだ。わたしより卑下される人が、上にいるのだ。

山か川かどちらかの名前の子より、わたしは少し周りから見た価値が高いのだ。

でもそれでも震えは止まらない。

手の指先から始まったそれは恐怖と結合し、いつのまにか腕を通り肩に行き着き、そして胴体を過ぎて足全体にたどりついていた。

震動は懸命に立とうとする筋肉の力を消していく。

足を地面に押さえつけてなんとか体勢を保っていたら、突然チャイ

ムの音が響いて、瞬間、全身の力が吸いとられたように抜けた。

第1章 - 2話

「見てよ、あの市村香織って子。惨めだよねえ相変わらず」

「ほんと、ありえない。なんであんなに惨めな子が、こんな学校に来ちゃってんだろう。迷惑だよ、ねえ」

「死んじゃえばいいのに、あいつ」

その日一日で、学校は地獄に一変した。

朝登校したとたん浴びせられる一言一言は、わたしを痛めつける道具以外の何者でもなかった。最初は耳に入らなかった言葉もいつしか、耳をふさげばふさぐほど敏感に聞こえやすくなってきた、誰かが近くで耳打ちしてるだけでも不安になってきた。

暴力はなかった。

殴る、蹴る。体の傷となつて後々現れるその行為を証拠として、先生にわたしがいじめられていることを告白する事を怖がっているのか。それとも、この人たちはそういう見た目でわかる傷の付け方よりも言葉で心をボロボロにすることこそが、最も相手にとって苦痛なものだということを知っているのか。

どちらにしても、わたしはみんなが急に自分とは違う世界にいるように、常に孤立感におそわれるようになった。移動教室も休み時間もどれもこれも独り。

陰口を言う人はだいたい決まっていたけど、そのぶん見ているだけの人もいつも同じ顔ぶれだった。

運命ッテ残酷ダヨネー。

お金のジャラジャラ入った財布の中身を確認しながら何の気なしに言う人たちが、わたしは大嫌いで大嫌いで、そして怖くてしやうがなかった。残酷っていう言葉を口癖のごとく簡単に口に出せる人なんか、本当に苦しいではない。実際はわたしみたいな人間に残酷さを与えてばかりいる、卑劣なやつだ。

将来ガフアン？

時々テレビのCMなんかで中高生がつぶやいている。

ふざけてるのか、それを見るたびそう思う。

わたしなんて、1分1秒が不安の連続だ。自分の隣を誰かが通るだけで鳥肌が立つ。将来大学受験があつていつかはきつと就職しないといけない、一体わたしはどうなつちゃうんだろう。そんな不安とは比べ物にならないほどの深い闇こそが、わたしの中でいう不安なのだ。

学校にいる間は、時間が消滅してしまえばいいと思っていた。でも時間は過ぎていく。

いじめられて、1ヶ月が経った。

このころわたしは夏休みを待ち望んでいた。40日間、ずっと誰からも存在を否定されないなんて、なんと幸せなことだろう。今では天国のような場所となつた家で好きなことをして好きな時間だけ寝ていられるなんて、天国を通り越した夢の世界だ。

そう思つた半面、でもよく考えたら、「あと1日くらい、いいか」と8月31日に甘えを見せてしまいそう。そして名前も知らないあの子みたいに不登校になつてしまう。

降参です。

そう白旗を揚げたら、ざまあみろと形のない背中を蹴られる。寒気がした。プライドじゃない他の何かが、敗北を認めることをいやがつていた。

そんな精神不安定なあのとき確信を持つて言えたことは、今は苦しくても必ず状態はよくなりますよ、なんていう病院の先生が言うその時だけの慰めなんかじゃなくてもっと厳しい現実、無視とか悪口くらいで嘆いてたら冗談抜きでわたしは完璧に壊滅してしまう、ということだ。

だから、わたしは、学校に行った。

けつして負けるなんてことは、したくなかった。

教科書を開くとどのページにもある、赤や黒の乱雑な色で書かれた中傷の言葉。

一度国語の授業中、先生にページ45を読むよう指示された。あいにくページ45は、というかほとんどのページは「バカ」とか「クサイ」とかで埋めつくされていて、読もうにも途切れ途切れにしか読めない状態だった。あのときしようがなく、「すみません忘れました」と言った時の惨めさははかり知れなかった。

頭の中で試行錯誤してるうちに夏休みが始まった。わたしは朝から晩までボーツとし続け、40日何も考えず過ごした。そうしているほうが、不思議と心は休まったのだ。でも常に40日後に迫る現実に対して、不安がどこにある。だから、休もうとしても充分には休めなかった。

こうしてあつという間に夏休みは終わり、そしてまた寂しさの鐘が鳴った。2学期が始まったのだ。

40日の空白が何かを変えてくれるんじゃないかと期待して、白旗を掲げることなく学校に行ってみたわたしだが、案の定前のままだった。けど、一つだけ変わったことがあった。

第1章 - 3話

「わたし市村さんと友達になりたいな」

体育の授業を誰もいない教室の窓からぼんやりながめていたら、突然言われた。

彼女 渡辺麻里はいじめられていないけどクラスでどこか浮いている、ただただ孤独なだけの存在。かといって無視されてるわけでもない。それに最近はまだそんな様子は無いようだけど、1学期の間は実に上手くクラスのいろんなグループと混じって会話していたようだ。いわば、嫌いだけどチャーハンが何かに入れさえすればどうにか食べられちゃうようなグリーンピース、と三つ子くらい似た存在だったと思う。

そんなわたしとは同じようでどこか違うような渡辺麻里に話しかけられたわたしは動揺しているかと思えば、思ったより平常心でいた。

「友達になりたいな」

黙っていたら、また言われた。

ものすごく危険な雰囲気を出している渡辺麻里の体を吟味したらさらに全身の毛が逆立って注意信号を示し、素直すぎると変わりものに思われちゃうよ、そう忠告したくなった。

「なんでここにいるの」

わたしは警戒の姿勢でそう聞いた。

「あ………実はわたしも体操服忘れちゃって。市村さんでもしょ？だから教室にいるんだよね。見かけによらず意外におとぼけさんなんだね、市村さんって。わたし個人としては、市村さんけっこうしっかりしたイメージがあるから」

「離れたほうがいいと思う」

「えっ？」

「わたしと一緒にいたら、渡辺さんもこうなるよ」

はさみでジヨギジヨギにカットされた自分の体操着をカバンから出

して、わたしは渡辺麻里に見せた。

今朝体操着がめちゃくちゃになっているのを発見したときの怒りとやるせなさ。わたしは体育が苦手だ。出来れば苦手なこととはしたくないけど、それを他人から強制的に禁止させられるのは耐え難かった。

「嫌でしょ、渡辺さんだつて、楽しんで生きたいでしょ」

必死に涙をこらえていたわたしをクスクス笑っていたクラスメイト。そしてそれを見ているだけの、いわゆる傍観者としてわたしをよりいっそう孤独な存在として作り上げる渡辺麻里を、呪うように見つめて言った。

「ああ……そうだったよね」

少し呆然の顔でつぶやいた渡辺麻里。

わたしに対して申し訳なく思っているのだろうか。

「でも、大丈夫だよ」

彼女はこう続けた。

いじめられている人間に手を差し伸べることなんて、普通自殺行為同然だ。なのに、渡辺麻里はそれを認識していないのか全く怯える様子を見せない。

あまりにも矛盾しすぎている。

渡辺麻里と一般という言葉のために、矛盾というものがあるような気がする。

お腹の辺りがくすぐつたい。

思わず、笑いそうになった。

久しぶりに、心から笑えそうになった。

わたしの返答を待っているようでポカーンとしているようにも見て取れる渡辺麻里の顔には、笑うしかなかった。

「おかしいんだね、渡辺さんは」

結局、わたしの口はそんな言葉と言ったのだった。

この日から渡辺麻里とは、関係が深まった。すぎるものが無かったわたしには、そう思えた。休み時間には必ず一緒にいるし、移動教

室も一緒にする。たまたま席が近かったから、麻里の教科書はいつしかわたしとの共用のものとなっていた。そのおかげか、今までの孤独感と絶望感で傷ついていた心の傷は少しずつだけどいやされていた。相変わらずその後もいじめは続いていたけれど、そのときは必ずといっていいほど麻里は止めに入ってくれたから、いつしか、靴箱もある程度おちつきを取りもどすようになった。

そして、いじめはなくなった。

皆に受けいられるようになったのだ。

まだまだチャーハンに混ざったグリーンピースにも及ばない位置だったけど、とにかくわたしは幸福だった。そしてわたしがこんな生活をしていることを信じられずにもいた。けれども疑念なんて湧かなかった。いつしか、あのとき覚えた恨みの感情も現実から逃げるための方法探しも、脂で汚れた皿が水とスポンジできれいになるみたいに浄化されていったはずだった。

第1章 - 4話

「どうしたの、これ」

麻里を友達と思えるようになってから数週間後。

朝わたしがかかとを踏む上靴のまま教室に入ったら、麻里は待ち望んでいたかのように近づいてきて、

「ジャッジャジャジャーン、ジャッジャッジャッ、ジャッジャジャジャーン」

「な………に？」

「びつくりした？ あのね、これ、お守りなの。持っていれば、二人は一生大丈夫。どんなことがあっても絶対に離れないんだって」
そう言つてビー玉よりは格段にキラキラ青で光る小さな水晶にオレ
ンジのひもがついたストラップを、わたしの手に置いた。

「まあセツトで300円だから、本当に離れないなんて保障できないんだけどね。でも、きれいでしょ。あ、もしかして青より赤のほうがよかった？ でも残念。これ、香織が青の持っていないと意味無いんだ。渡すほうは赤を持つことって、説明書に太字で書いてたの。どっちでもいいんじゃないかって最初は思ってたんだけどさ、でももしその油断でわたしと香織が離れちゃったらって不安になってちよつと大げさなんだけどね」

『香織』って呼んでくれる、呼び捨てで。

麻里といっしょにいるようになって、いつしかそう呼ばれるようになって、そのたびに感じていた深く温かいものが、今になってゆつくり、そして徐々に滝のような豪快さであふれ出てきた。

「………ありがと」

気がついたら、涙が出ていた。

泣いている今のわたしには、周囲の視線すら感じれない。
ただ、率直に嬉しかった。

「ど、どうしたの」

「ううん。何でもない、ごめんね、わたしこういう経験今までほん
とになくて」

「いや別に謝る必要はないんだけど……ちょっとびっくり
して。でも嬉しいな、香織が喜んでくれて。まさかここまで感謝さ
れるとは思わなかった。こっちこそ、ありがとね」

「……うん」

ストラップを汗にじむ手で優しく包み、わたしはうなずいた。

第2章・1話

「明日、ヒマ？」

金曜日の帰り道、別れ際にわたしは言った。

「うん。まあヒマかな。あ、でも午前中クラブある」

「そうなんだ。じゃあわたしもお昼までクラブだし、終わる時間はほとんど変わらないよね」

「まあ、そうよね」

「じゃあ2人で、午後からでいいからどっか行かない？」

もうこの時、麻里がわたしを裏切った事は発覚している。だからこそ、わたしはこんな誘いを持ちかけたのだ。

「どっかって、どこに？」

「さあ………。麻里が決めていいよ」

わたしはこのとき行きたい場所を決めていたけど、ついあと一步を踏み出すことができず、話の流れをあくまで自然に、自然に望む方向へもっていくことにした。

「麻里の行きたいとこって？」

「そりゃあやっぱ、旅よ旅。電車乗って遠く行って……」

「やだ、ぜーったいやだ。わたし今お小遣い止められてるの。ただでさえ高い電車賃は中学生になって2倍になったんだから、たまつたもんじゃないの。だから、できるだけ無駄な出費っていうやつはしたくないの」

「ああ分かった、この前のテストでしょ。そりゃあの点数じゃねえ。自分が汗かき働いてかせいだ金を、ただのおバカさんに使われるなんて全く、たまつたもんじゃないわねえ」

「……。はいそうですよ、どうせわたしはバカですよ」

「そんな、冗談なんだから怒らないで」

「だってマジでやばかったんだもん、テスト。なのに『大丈夫だよ、これくらい』の慰めなしにバカバカばかり言われて。言われたほ

うはたまんないよ」

話それてる。

出来れば、このままそれでほしい。

でも本当にそれたらわたしは壊れてしまう。ただでさえ、今我慢の限界なのにこれ以上耐えるようなことがあったら、わたしは何をするか分からないだろう。

「はいはい、ごめんごめん。特別に謝るからかわりに香織が場所決めていいよ」

思わず迷った。

チャンス、というものをわたしは自ら逃す性質なのかもしれない。もしくは変な優しさがあるのかもしれない。この前起こった事件、それをきっかけとして麻里を本気で恨んだ、はず。なのにまだわたしは麻里を許している。ひどいことをした麻里なんだから、どうなっただって構わないのにわたしは躊躇している。

どうしようもない感情が体をかけめぐり、わたしは途方に暮れ遅刻した昨日の日のことを思い出していた。

第2章・2話

結論から言うと、麻里はわたしをだましていた。

そしてそのせいで、現在わたしも麻里をだまそうとしている。

そもそも孤独なわたしが、そうそう良い人生なんて送れると考えていたところから大間違いだったのだ。おそらく、わたしは前世ひどいことをしたのだろう。じゃないと、こんなに苦しむ理由が無い。最初から疑っておけばよかった。麻里が不自然なほどの笑みでわたしに声をかけ、友達になろうなんて誘ってきたことに対して断っておきさえすれば、わたしは引き続いていじめられていただろうけどそれよりももっと辛い気持ちを味わうことはまずなかった。

「ねえわたしのルーズリーフ知らない？」

昨日の夜、カバンに入れたのに。

雨が降る予告をしているかのような薄黒い雲が空をおおう。

休憩時間トイレに行って帰ってき、授業開始のチャイムと共に教科書等を準備してたら、横に薄い青の線が等間隔でひかれた、縦の端にずらつと穴が並んでいるあのルーズリーフと呼ばれる紙が1枚じやなくてまるごと、全部なくなっていることに気づいた。

買ったばかりの紙。お小遣いピンチのときでも生活必需品は買わないといけない。しょうがなく105円出して買った、貴重な紙。それが無くなって、少しあせった。

いくら探しても見当たらないから、わたしは麻里に聞いたのだ。

「そんなの、知らないよ」

わたしの問いかけに麻里は冷たく答えた。

「でも……昨日ちゃんと準備したんだよ。それに……
・そう、朝学校に来たときあれ使って宿題やったんだから。絶対、
これは確信持っていえる。だから、学校のどこかにあるはずなの。」

ねえ、本当に知らない？」

「さあ。分かんない。やっぱり忘れたんじゃないの」

数学の先生は特に口うるさく、生徒に対して厳しいからなのか、麻里はわたしが後ろを向いて話しかけているのを迷惑そうにしている。その証拠に、麻里の顔は無関心に満ちていた。

こんなにも麻里が素っ気なかったことなんて今までにあっただろうか。

聞いても麻里は答えてくれなさそうだから、わたしはあえて黙ったまま前を向きなおし、先生が黒板に書いていく宿題の答えを丸つけのできない右手で持つ赤ペンを呆然と見ていた。

そして、

「やっぱり忘れたのかな……」

と心の中でつぶやいた。

わたしの本心では、そんなことはない、そう否定していた。でも最終的にきっぱりと否定しなかったのは、やっぱり完璧な自信なんてわたしには持てなかったからだ。

それからなぜか、1週間に2回は物がなくなるようになった。それも決まって学校にいるときで、家の私物なんかは使ったままそこらへんにほったらかしにしているも容易に見つかるくらいだった。といっても、わたしはそれほど片付けが苦手じゃない。使ったら元に戻す、これくらいはわたしの中で当然のことだった。

なのに、物は持ち主から逃げるようにしていなくなる。あまりにも運が悪いとしか言いようがないくらい、物がリズムカルに消えていく。わたしは不思議に思いつつも、何かわからない未知数以上の怖いものが動いていることを、このときまだ感じていなかった。

そんな不安の中1ヶ月経って、わたしはやつとあることに気づいた。なくなるものはいつも買ったばかりの新品なのだ。だからこそわたしはしょうがないか、と行方不明の私物に対して簡単にあきらめることができず、少しあせってまで麻里に聞いてまで探していたのだ。最初に紛失したルーズリーフだって、なくす前日に購入した春のに

おいがするくらい新しいサラサラの紙だったし、その後行方をくら
ましたのりだつて、ちょうど中身がきれて買った3日後のことだっ
た。キャップをまだ一回も外されることなく、購入者の元から消え
たのり。寂しかっただろうか。もしかしたら、のりはそれを望んで
いたのかもしれない。

じゃあどうして、逆にあれは無くなってくれないのか。中傷のこと
ばが水で洗ったってこすったってどうにもならない、わたしが一番
辛かった時期をそのまま表現している教科書などの、どうせなら破
つて深い沼に捨てたい物が、きれいなくらいさっぱり残っているの
か。

わたしはもしかしたらいじめが再発したのかも、わたしにお金を無
駄に浪費させようとしているのかも、そう一瞬疑いもした。でもそ
んな風なやり方で人をいじめるなんて話聞いたことないし、それに
物が無くなったら誰かに借りるか自分で買つかのどちらかで補えば
いいから、悩むほどのことでもなかった。

ただ、あれから麻里はわたしに対しての接し方が激変していた。お
互いクラブ活動の無い日、「帰ろう」とわたしが誘っても麻里は、
用事があるから、ちよつと無理、今日はそんな気分じゃないの。そ
ればかり。

そしてとうとう、裏切りの日はやってきた。

第2章 - 3話

「……うそ」

麻里からあのストラップをもらった1ヶ月半後。

無くした物の数合計10個を突破したころ。

11月15日水曜日。

わたしはたまたま体調不良で遅刻して、3時間目のはじまる直前に学校についた。3時間目は確か音楽のはずで、麻里を含む2年5組の生徒はそのとき全員音楽室にいるかもしれない。そこへ移動中のはずだった、普通なら。

なのに、

「うそ……」

教室で麻里が。

麻里がひとり。

たったひとりで、わたしの机に座っていた。

麻里、何してるの、授業遅れるよ、行かないの。

そう声をかけようと口を開きかけたら、全身が硬直するくらいの事実が分かって、わたしは、伸ばした手をとっさに引つ込めた。

麻里の、黒板に向いた麻里の背中が、不気味に曲がっている。気のせいかもしれないけど、目は無色。ひもを引っぱっても点かない電気スタンドみたいに、力の無い目。背もたれとお尻をおく部分でできた直角を、半回転こつち側に動かしたときに見て現れる長方形の隙間には、麻里の足が入っている。

生きている人の目とも死んだ人の目とも違う何か。麻里の無色な瞳には映っているようで、わたしは怖くなった。

それだけじゃない。

ただそうして、座っているだけじゃなかった。

麻里、わたしの買ったばかりのシャーペンを筆箱から選り取る、自分の胸ポケット、そこに、忍ばせている。

わたしは後ろを向いた。

違う違う、嘘だ嘘。風邪だ、風邪だ、風邪のせいだ、朝から響いていた頭の痛みのせいで見間違えた光景だ、見間違い見間違い。でもそうじゃなかったら。わたしは見てはいけないものを見たことになる、どうしよう。

後悔とあせりがあさがおのつるのよう絡み合う。

……わたしは再び、教室を見た。

……変化していない。

いくら目をこすってみても、さっき見た景色は全く改善されことなく、といって悪化しているわけでもない。

それが逆にわたしを不安の縄でしばりつけた。

退屈そうにあくびをする麻里を見れば見るほど心は詰まる。全身がきゅくつた。

しばらく驚きで呆然と見つめていたら唐突に、麻里は消しゴムを筆箱からむしり取るようにつかむと思いつきたたきつけた。きれいな直方体の新品の消しゴムはかわいそうなほど無音で、弾むテニスボールよりも不器用な虚しい無音で床からはねかえった。最後には、わたしの足元に波線をえがきながら転がってきた。

ほこりがついて黒っぽくなっている。

なんだか悲しくなった。

麻里を見るかわりに、涙を流すかわりに、うつすら汚れた消しゴムと目の端で上靴を見ていると、自分のちっぽけさと弱さを痛感してしまう。わたしが惨めで情けないから、こんなことになってしまったんだと思ってしまう。

「おはよう市村さ、」

「うそだよねっ！」

無意識に出た大声は長い廊下に寂しく反射して、となりの教室から流れてくるざわめきと食いちがいがいながら、違和感を残して調和した。

「言つてよ……うそつて言つて……」

心臓の音だけが耳に入っていた。

ドクンドクンドクン、鼓動のはやい音に頭痛がした。

どうしたの市村さん、何かあった？

それよりも大丈夫？熱、あるんじゃないの。

学校休まなくていいの？

無理してこなくてもわたし平気だよ。

別に寂しくなんかないからさ。

だからわたしのことは気にせずに、早く帰ったほうがいいよ。

「ね、市村さん」

気がつくとなわたしの目の前に麻里はいた。

長細く笑みをうかべている麻里の赤いくちびるは、思わずわたしを震え上がらせる。そこにいる麻里はまるで本物の麻里じゃないようだった。

「ねえ………麻里、」

「渡辺麻里よ、わたしは」

「………麻里？」

「わたしがあんたを市村さんって呼んでるように、あんたもわたしを渡辺さんって呼ぶのよ」

麻里に言われて初めて麻里が、わたしを市村さん、と改まった言い方で呼んでいることにやっと初めて気がつく。チクチク先のとがった針が、心をプツプツと、傷を見るのも嫌になるほどの痛々しさで突き刺した。

「ほら、市村さん。わたしを渡辺さんって呼んで」

「………いや、いや」

「どうして？そのほうがいいじゃない。変にわたしばかりさん付けで呼ぶより、揃えたほうが一体感があっていいじゃない。あ、誤解しないでね。別に今までの関係を否定するわけじゃないから。それにわたし、これからも市村さんと仲良くしていきたいの」

「え………」

「言ったじゃない。あの赤と青のストラップをお互い持ち続けているなら、二人が離れることはないって」

「・・・・・・・・」

「わたしと思うにあれは約束だと思うんだよね。市村さんがあのストラップを受け取った時点で、わたしと市村さんは何があっても離れちゃいけないって、約束したんだと思うの。だから市村さんはわたしにはむかつちゃダメ。幼稚園のときに習ったでしょ？ 約束は守らないといけないって」

「・・・・・・・・あのストラップもうそだったの。」

わたし、本当に嬉しかったのに。

涙がでるくらい嬉しかったのに。

全部うそだったの・・・・・・・・。

全部わたしの、一人よがりだったの。

「わたしの言う事に間違いはありますか、市村香織さん」

「・・・・・・・・ねえ」

「発言ですか、どうぞ」

「ねえ、どうして」

「質問ですか。許可しましょ、」

「どうしてこんなことしたのっ!？」

心でざわついている不安や怯えなんかの細かい粒の土が、少しずつ集まって粘土のようにねられてきた丸い泥団子状の感情の硬い塊が、のどを不快に鳴らしながら口からはき出た。

塊をよけきれなかった様子である麻里は、目を大きく見開き一歩下がった。しかしそれもほんの一瞬で、すぐに麻里は、不気味にわたしを見下ろした。

「ふふん。変なこときくのね。どうしてこんなことしたの、か。決まってるじゃない」

「決まってる？」

「うざいからよ」

心臓が破裂した。

そう感じるくらい、胸が痛かった。

麻里を本気で怖いと思った。

どうしちゃったの麻里、何かあったの。

聞こうにも聞けない。

「どうしたあ？ 傷ついたような顔してるの？ あ、もしかして気づいてなかった、自分のこと。それが分かってても見て見ぬふりしてたとか。そりゃあ傷つくよね。でもこれが現実なの」

怖い、麻里の変化が恐ろしい。

「まだ受け入れられないの、最悪にうまれた自分を。じゃあ教えてあげる、あなたはいないのよ、この世に。いても存在しないの。なのにいちいち学校に来て一日中ずっと暗く座ったままで、これじゃあいてもいなくても同じじゃない。まあ、わたしはどちらかというとなんなあんなを笑ってけっこう楽しんできたんだけどね。だからわたし個人としてはいてくれて正解だった。たぶん皆もそう」

「だったら、」

「でも人間ってかわいそうなのか好都合なのか、とつても飽きつぱくつくられてるのよ」

「・・・・・・・・」

「それにしても、あなたバカねえ。わたしの本心に気づかないなんて。人と接しないぶん人を観察してるのかと思ったら。どうやら才能や素質はゼロもない、マイナス以下のようね。劣っている。全てにおいて劣っている。何の取りえもない」

心にズキツときた。

「いじめて嫌でもこれないようにさせようって。もう名前も忘れちゃったけど入学してすぐにへこたれちゃって来なくなった、あいつみたいにさせようって。いつのまにかクラス全体でそう決まったのに」

不登校児の山か川かどちらかの字が名前にある子の顔が、おぼろげながらも浮かんだ。そのとき、少し心に新たなものが芽生えた。

「ねえ、なんであきらめなかったの。簡単にあきらめちゃえば、あ

なたも永遠に楽でいられるし、わたしたちも悩み解決で一石二鳥だったのにさ。どうせ学校に来たって苦しいだけだったくせに、なんでわざわざ来たの？ あ、もしかして自虐的行為に走っちゃったのか。いくらなんでもそれはな・・・」

「負けたくなかったから」

言っていた。さっきまで足がビクビクしてたのに・・・麻里の言葉を無意識にさえぎり、言っていた。

もはや自分をコントロールするのは不能だった。

目の前の視界がぼやける。

頭がギンギン痛い。

くらくら目眩がした。

「はっ、負ける？ もうあんたはとっくに負けてるじゃん」

「違う・・・・・・」

「ど、どこがよ」

「香織の言ってる負けと、わたしの言ってる負けは・・・違う、全然ちがう。そりゃあわたしも一度は負けたと思った。元々勝ってるなんて、考えたこともなかった。でも、やっぱり悔しかった。たぶんあのとき麻里がわたしに話しかけてこなかったら、わたしはみんなに仕返ししてたかもしれない。だから」

ふらふら揺れて倒れそうになりながら、自分でも目つきが怖くなっていくのが感じとれた。酒に酔っ払ったら、こんなふうになるのだろうか。

「もしかすると、わたし壊れちゃうかもしれない。なんだか自分が自分なのか分らない。今まで復讐は行動になんてできるわけなかったけど、もしかしたらしちゃうかもしれない」

「いきなり何を言うのかと思ったら、そんなこと。あまりにもくだら、」

「注意しといて」

「何を」

「わたし、麻里を傷つけない。でもね、ごめん」

「・・・・・・・・」

「もう止められないの、我慢の限界なの」
分かるわよね、この気持ち。

複雑なんだけど分かってしまう。

やつちやいけないことほど、人は簡単にできてしまうの。

悪いことをするために、勇気なんていらないの。

麻里がやってきたことだって、それと同じ。

「だからといって、わたしと麻里の関係は変わらないよ、いつまでも。だって・・・・・・・・」

窓から入りこむ風が、机上のプリントを吹いた。

「このストラップがつないでくれているから」

香織の手にある携帯とひもで結ばれた水晶、ストラップの水晶は怪しくうつすらと・・・・・・・・そして戸惑い気味に、光を放った。

第2章・3話（後書き）

僕自身、この展開はちょっと無理があるんじゃないか、と思うところもあります。

が、なんとか最後までまるようにしますので、
それまで時間かかるかもしれませんが、
よろしくお願いします。

第2章 - 4話

わたしが一つだけ、麻里に頼んだこと。

市村さんって呼んで欲しくない。

いくら麻里がひどいことをしたとしても、わたしを市村さんなんて初対面の面接官から話しかけられるみたいには、それだけの関係として安易に呼んで欲しくなかった。もちろん香織、と気安く話しかけられるのも抵抗はあったがまだ耐えれた。

本心を言うと、わたしは麻里を手放して陽気になるほど心は夕焼けの和む温かさで満たされていない。わたしは、麻里がいなくなると、必然的に孤独になる。冷蔵庫に入れたばかりの麦茶より生ぬるい、思わず悪寒のする温度で独りになる。だからこそ、どんなことがあっても麻里は大切にしよう。そう心に刻んだのだ。なのに復讐心は、全く消えようとしてくれない。

「香織はどこに行きたい？」

「え、あ、何？」

「だから、香織の行きたいところは？」

「……デパート、かな」

「えっ、ナ、ナンデ？」

「理由なんて、ないけど……いけない？」

「いや別に、ただ、わたしは、あんまり買い物とかしないから」

「でもこの前ストラップくれたじゃん……。買い物好きじゃないと、普通あーいうのにお金は使わないよ」

言った瞬間、あ、失敗した、そう思った。

いくら麻里の今までの言動全てがうそだったとしても、ストラップだけは傷つけちゃいけないような気がしていた。あれだけは、まだわたしは持っていたからだ。それを、あーいうのにお金は使わない、なんて。完璧な失敗だ。今流れている重い沈黙を含めたら、失敗を乗り越えたものになる。

「じゃ、じゃあいよいよ、デパートで」

氷のように固まった空気をもみほぐすみたいに麻里はそう了承した。

「うん。じゃあ明日クラブ終わったら校門で待ちあわせね」

「ああそうしょっか」

「うん………また明日ね」

「うんっ………あのさ香織」

「ん？」

「わたし気になってたんだけど」

「何が」

「今さらなんだけどごめんね」

「えっ」

「だって、わたしひどいことしたじゃん。香織はわたしのこと友達
って思ってたくれたのに、わたしはそれどころか人間以下みたいな
扱いしてて。拳句の果てにはいてもいなくても同じ、なんて言っ
ちゃって。わたし、香織のこと最低みたいな言い方で傷つけちゃって」
いきなり何？

謝ったくらいでわたしがあなたを許すとても？

もし本気でそう思っているのなら、わたしはたぶん許さないだろう
けど憎みもしないだろう。だってわたしは、今も麻里を嫌いだとは
言い切れないし、恨んでもいない。でも完全にわたしが傷ついたぶ
んの苦しみを麻里に味わってもらわない限り、死ぬまで一生気がす
まないだろう。でもどうしてだろう。何か、いけない気がする。こ
のまま麻里に復讐することを、ためらってしまう。

ポケットに手を入れる。

指先がストラップを感知する。

「大丈夫だよ。わたしだってこのまま適当に中学卒業して高校入っ
てたぶん大学行って会社入って結婚して年金生活、最後は苦労して
死ぬ、なんて。そんなの絶対いやだから。せめてわたしが平均でい
たい。わたし以上に辛い人とわたし以下に辛い人が同じくらいいて
ほしい」

このまま麻里だけハッピーエンドなんてありえない。

そう望むからには、わたしの進む道はたった一つしかない。

完璧な復讐。

思いだけじゃ変わらないから行動で心を表す、そういう復讐。

じゃないとわたしは、これ以上先に進めないから。

麻里に復讐なんてほんとはしたくないけど、ここですつとさまよい苦しんでいるのはいやだから。

ごめんね、麻里、わたしのわがままに、付き合わせちゃって。

決して麻里には聞こえないであろう心の声で、わたしは、道に転がっている丸い小石をつま先で小難しそうにいじる麻里に向かって一応、言っておいた。

第3章 - 1話

復讐の作戦はこうだ。

わたしと麻里が制服を着てデパートに行く。次にわたしが万引きをする。ここで重要なのはわざと店員に見つかるくらい、のろまに商品をバッグに入れることだ。かなりの確率で店員に万引きを目撃される予定であるわたしは、予定通り店員に見つかりそして全速力で逃走。どうにか上手く店員から逃げきったであろうわたしは、一刻も早く麻里に万引きした商品をプレゼントだとか適当に言って渡し、デパートを何事もなかったかのように去る。おそらく店員は制服と学校を照らしあわせてわたしの通う学校にたどりつくだろうから、そのときになって万引きされた商品を持っている麻里は犯人の疑いをかけられるだろう。

もしかしたらこれは作戦じゃないのかもしれない。ていうか、誰が見ても作戦というよりはアニメの悪役なんか密かに夢見る世界征服、というのに近いような気がする。そんなことだけの権力がある人にだって出来やしないし、おそらくしようとする人だっていないだろう。それくらい、成功率の低い希望なのだ。

失敗してもいい。正直、わたしはどうでもよかった。自分が何をしたいのかさえ不明だったし、目的すら分らない。ただ、想像力のないわたしにはこれが精一杯だった。麻里を痛めつけたい、苦しめたい、でもどこか違う。こんなことしたって、意味の無いように思える。

それでもわたしは止められなかった。

水晶はまだ光っている。あの不気味に、戸惑いながら光ったあの状態のままで残っている。だから、止められない。

クラブは休んだ。学校に来ているのに休むなんて、どうかしているだろう。自覚しながらもわたしはどうしても、この複雑な気持ちでクラブ活動に参加してしまったら、このまま麻里に会いたくなくな

ってしまつような気がした。

「今日、わたしは、万引きをするのかあ」

口に出しても実感がわかないのは、わたしが今の中学生にしては珍しくコンビニもほとんど行かず制服もダラダラ着ず校則ですら守ったりする、万引きなんて犯罪とは無縁の生活をおくってきたからだろう。

振り返ればわたしは真面目すぎたのかもしれない。

勉強やスポーツクラブに励んでいたとかいわゆる品行方正という性格ではなかったけど、人並み以上は努力していたと思う。いじめられていたって、つまらないという理由だけで学校を欠席遅刻しまくっている人よりは確実に多く登校していたし、誰も見ていないところで悪事らしきものはたらいた事もなかった。じゃあどうしていじめられていたの？

もう終わつたことなのについ思い出してしまふ。

わたしが浮いていたから？

ともだちがいなかったから？

誰かに問うて

「そうじゃないよ」

と慰めて欲しいけど、実際は自分の中でもう答えは分かりきっていて、これは事実でありまた認めないといけない弱さなのだ。

といったってわたしは自分に負けているとは思わない。

ただ、自分に勝っていたとしても他人には負けている。

これだけは認めたくなかった。

でも、今までの経験で嫌でも思い知ったことだった。認める以前に受け入れないといけない事実。

悔しい。

思わず唇を噛む。

うつすら血の味がした。赤い色ってこんな味なんだ、と思った。

瞬間、わたしはこのまま突き進んで大丈夫なのだろうか、足がすくんでしまつくらいのか覚えた不安感に襲われた。

そのとき、雷の音がした。

ゴロゴロと空気を揺らしたあとピツカーンと空に亀裂をいれる。

空は一面暗い色で染まっていた。

幸いまだ雨の降る様子はなかった。でもいつ降ってもおかしくない、怪しい空の色だった。

第3章・2話

あれから十分後、空はますます濁っていた。

麻里はまだ来ていない。わたしはというと、麻里を待っているのか待っていないのか分からなくて、できれば来て欲しくないと思ってたし、来たら来たで何かが変わりそうで、もどかしかった。

その時だった。

「香織っ」

呼ばれた。

振り向く。

「おまたせえ。ほんとともうちよつと練習する予定だったんだけど、なんかこの天気であ。ランニング？そんな感じのやつをしてたら雲がこんなになつて。元々テニス部は部員も少ないし遊び感覚で入部した人ばかりだったから異議無しで練習中止、って決まったの」

笑顔すぎる。

こんな素敵な笑顔を持つ麻里を、裏切つていいのだろうか。

いや、わたしはこの笑顔の持ち主に裏切られたのだから、仕返ししていい権利は充分にある。

なのに………なのに心が締めつけられる。

悲しい。

復讐でしか事を片付けられない自分が悲しくて憎い。

「良かったあ。じゃあ早速デパート行かないと。すぐ本格的に降りそうだもんね」

それでも感情を押し殺して、わたしは震える口で言った。

「え………行くの？普通やめない？こういう時って」

麻里はわたしを信じられない様子でながめた。

「そうなの、かな。でも、屋内だから心配ないよ。それに、家に帰る途中で降ってくるよりここから近くデパートに………雨

宿りっぱく寄ったほうが、ひまつぶしにもなると思うし。それにもしかしたら通り雨ってこともあるし」

自分でもめちゃくちゃなことを言っていると分かっていった。なんとなく矛盾しているような気がする、しかも雷が珍しいくらい堂々と鳴っているのにいちいち午後の予定どおりに動こうなんて提案するなんて。違和感がありすぎる。でもわたしはどうしても後にひけなかった。ひきたくても、そんな勇気わたしには皆無だ。

「ねえ、こんなこと話してるうちに」

肩にポツツと水がおちて、服にじわりと染みこむ感触がした。

「降ってきちゃったよ」

麻里がそう言い終わったころにはもう土砂降り。

ザーザー降る雨のせいでわたしの前で立つ麻里の姿がまるで、霧に隠れてしまったみたいにはつきりと見えなくなるくらいの大雨だ。水の長く細い、そうめんのような糸でできた白いカーテンで隠れた自らの下半身。麻里がこの前言うていた『いるのにいない』というのはまさにこのことだったのかと、初めて首を縦に振った。時間だけが過ぎていく。

雨の勢いが強くなるにつれて時間のスピードも速くなる。

いつのまにか自分が酸性雨でドロドロになる像のようになってしまったような恐怖感を覚えていたわたしは、内心あせっていた。

「香織……かさ持って、ないよね」

わたしの肩から腰のほうまである、水色のショルダーバッグの中に折りたたみ傘なんかが入っているんじゃないかと考えたのか麻里は、少し遠慮がちに聞いた。

わたしはあいにくそんなもの入れた覚えはまったくといいいほどなかったけど、即座に「ない」と言えばますます雨が止む率が減りそう。自然はわたしたちに味方してくれない。

もう嫌っ、そう叫びたくなったわたしはバッグの中身が濡れるのを気にすることなくファスナーを全開にし、ガサガサと無駄に多い小物をかきわけ麻里のお目当ての品を必死に探した。こうして心の中

で居場所を求めて暴れまわる感情を抑えた。

しばらくしているうちにそれらしきものがないと認識してもわたしはあきらめきれず、仕舞いにはバッグを逆さまにして中身を全て道に吐き出していた。小物と道がこすれたりぶつかり合ったりして出る様々な音が、心を虚しく刺激する。

もう泣いてしまおうかとも途中で思った。

でも一つ一つぎこちない動きをする手でチェックしてるうちに冷静になった。

無いと分かっているものがいつのまにか入っているなんてことが起こるわけもない。

もうしょうがない、わたしはこういう人なのだ。

川のように水たまりが連なっている道にひざをつく無様な格好で、

「ごめん。無かった」

と言うことしか情けなくてもできなかった。

わたしは一度、心の中で恨むことに挑戦して結果挫折したことがあるけれど、これは挫折というよりはしょうがないことのような気がした。

性にあわないことはしなみに限る。

もうわたしは復讐など、どうでもいいと感じていた。

そしてそのとき、

「行こうデパート」

麻里は怯えているわたしに気づかずそう言った。

「ほ、ほらわたし、こっからだと家よりデパートのほうが近いからさ。だから、別に香織のためとかじゃないから。気にしないでね」

「う、うん……」

適当にうなずきながらも内心わたしは麻里に感謝していた。

わたしをいじめてきた、麻里に感謝していた、心から。

いつてもわたしの熱い復讐心をふたたび燃やしてくれたからではもちろんそうでなく、ただ、ただ……わたしは今まで同じ年代の子の家に遊びに行ったりいつしよにどこかに出かけたりとか、

そういう経験が一度もなかったのだ。お父さんもお母さんも一人っ子だったため、いとこ、という存在がいなかったせいでもあるけど、何だかんだ言って一番の原因はわたしの雰囲気、性格にある。人を寄せつけない独特の暗い雰囲気と、人とうまく付きあえない不器用な性格。自分で言うのも変だけど、この二つが合体すれば最強だ。なかなか誰もわたしに関わろうとしてくれない。

事実そうなってきたし、今だってそうだ。もうこれは何度もいうけど認めている。でもやっぱり我慢してきた。普通とちがう人生を拒んでいた。だいたい普通って何なんだろうと、真剣に考えていたほどだ。

でも、やっぱり普通の第一条件は友達がいることだろうなあとどこかで決めつけていて、いつのまにかわたしの中で麻里と仲良くすることが幸せへの第一歩、という思いが強くなっていた。いくらひどい麻里でも、いないといけないでわたしは困る。

まだ自分のことも分らないけど、これだけは言える。

「ジャジャーン」

下を向いていると突然、麻里が嬉しそうに言った。

びっくりして首を45度の形に傾ける。

麻里の手にあの傘がある。くるっと杖のように曲がった部分のある、折りたたみなんてコンパクトすぎる道具じゃない、柄が独特の形であるあの傘を麻里が持っている。

「ずっと持ってたんだよ。なのに香織、全然気づかないからおもしろくなつて隠してたの。ごめんね、ごめん。ちよつとふざけたつもりだったのに、香織の荷物、全部ぬらすことになっちゃって」

一瞬にして、わたしの全身は軽くなった。

こうしている間にも制服は濡れているのに、それすら感じさせないほどカラッとしていた。

「ううん。大丈夫。ていうか、早く差そうよ、持ってるんなら。もうずぶ濡れだから……意味ないけど」

顔を見合わせてわたしと麻里は微笑んだ。

そして麻里はオレンジの傘をバツと差し、入れ、とても促すように肩を首のつけ根のほうに縮こませ、傘の下に広がる小さなスペースの左半分を空けた。

わたしはゆっくりとそこに入った。テニスラケットの入った長い麻里のスポーツバッグで、わたしの左肩はその狭い空間に入ろうともしてくれない。それでもわたしは、半分ポツカリと空いた空白を最大限に活用できるよう優しく埋めるよう努めた。せつかくの麻里の気持ち、無駄にしたくなかった。

止まない雨はない。

雨は幸福の一手手前。

そう信じて、わたしは麻里と共に目の前に広がる長い長い道を歩きはじめた、恥ずかしいけどやっとそうなれたのかもしれないしなかった。

「なんか、わたしたちおかしいね。デパート行くだけでこんなに色々喋りあわないといけないなんて」

麻里の言葉に、純粹で素直な笑みが思わず、頬にこぼれた。

第4章 - 1話

その日は学校全体が騒がしかった。

騒がしい、というよりは全体としておしゃべりの種類が違っているような、いつもなら他愛のない話で盛り上がっているはずの生徒たちが、今日はありがちな話にいつい興奮していた、といった感じた。でもその興奮を簡単には表に出すことはさずかにはばかれるようで、生徒たちは裏でおどる感情を押し殺している。声を締めながらも拡大しつつ話すいやらしいその光景は、わたしを震え上がらせた。
息苦しい。

そう感じた瞬間、あっ、麻里はどこだろう、思って辺りを見回すと麻里はみんなから少し距離を置いて自分のいすに座っていた。

「麻里一体どうしたの？ この騒ぎ」

周りのヒソヒソ声に嫌でも合わせないといけない気がしてわたしは半分息だけで、そう麻里に聞いた。

「・・・・・・万引きらしいよ」

麻里は言いたくなさそうにそうつぶやいた。

急に、心臓の鼓動が速くなった。

あれ以来わたしは『万引き』という言葉に敏感になっていた。そのせいからかそれとも他に自分でも気づかない理由があったのか、麻里のつぶやきは臆病なくらい小さかったのによく聞こえた。

「万引き？」

斜め下を向いている麻里の表情は見えないけど、確実にいつもとは違うものが、麻里の中には秘めていた。

話題のテレビの感想批評、昨日起こった出来事の報告、そんな話より万引きという犯罪の話に夢中になっている生徒に対しての奇妙ささえも、一度あった食欲が風船から空気が抜けるみたいに無くなったときのあのもどかしさで消滅した。

「万引きって……どうしたの？」

一旦教室から出、教室よりは空気のやわらかい誰もいないトイレでわたしは聞いた。電気の点いていない薄暗いトイレは、まるで小窓からかるうじて入ってくる陽の光で生きているよう。

この前自分が万引きをしようとしていたせいか、実際したわけじゃないのにもかかわらずわたしは不安になり、顔や手から汗があふれ出て、息が上がっていた。

あまりにも静かすぎる。ドアをピタリと閉めても隙間を見つけて入ってくる廊下からの小さいかつ大きい、口から耳に伝わる声がここにはきちんとあるのに、静かすぎる。

どこからか風の音が不気味に入ってきて、奇怪な音をたてる。なんとなく声が出しにくかった。

「なんで、万引きの話がこんなに学校で、話題になってるの？」

それでもなんとか言葉を言ったら、

「うん。それがね、駅前のデパート、なんだって。……この学校の生徒の誰からしんだって。わたしは違うと思うんだけどね」

「そ、それで？」

「うん。わたしは違うと思うんだけど、でもみんな言ってる。この学校の誰かが万引きしたって。けどたぶん、っていうか絶対うわさだよ」

「うわさ？　ほんとに？　ていうか、うわさでも本当でもいいから、なんでここの学校だって分かるの？」

「うん。本当かどうかは、分かんないんだけどね、店員が商品をカバンに入れるところをね、目撃したんだって、よく分かんないんだけどね。でも……それで追いかけたら逃げられたんだって。ただ、誰かがその現場を見てたらしくて、それで、その誰かが先生に見たことそのまま言っただって、それで……」

わたしが立てた計画となんとなく似てる。いや、わたしが立てたのは計画じゃなく要望だ。でも麻里がそれを話したら、どうしてだか

とても緻密にできた策略のように思えてしまう。

でも、今の麻里は何かに怯えている。少なくとも、麻里のぎこちな
いしゃべり方から見て取れた。わたしのほうを決して見ようとしな
い麻里はこれ以上話したくないようで、また話す力も残ってないよ
うで、口を動かすほど冷静な感情ではないようで、ただ、黙りうつ
むいたままでいる。

「麻里…….?」

そのときちょうどチャイムが鳴った。

瞬間、それを口実とするかのように麻里はわたしを置いて、トイレ
から駆け足で出ていった。

「まさか…….。違うよね」

麻里が万引き。

想像しただけでも息が震える。

「…….。違うよ、きっと」

友達を疑ったらいけない。

わたしを地獄から救ってくれた友達を、疑ってはいけない。

もちろん麻里は一度地獄にわたしを落としたけど、それでもわたし
は麻里を嫌いになれなかった。つまりそれほどわたしと麻里には深
いつながりがあるはずなのだ。

友達は、信じないといけない。

自分の中に新たな決まりごとを作り上げた。でも、わたしは安心と
恐怖が理性と感情のように葛藤することに慣れていず、ただ、足に
力をこめて教室へ戻ろうとするだけで疲労感がどつと出た。

「麻里が万引きなんて…….。」

麻里はマンビキなんてしない。

水晶ついたストラップ、を渡してくれたときの麻里のあの笑顔が頭
の中でよみがえって、わたしはしばらくしてどうにか半分だけそう
思えたのかもしれない。

第4章・2話

その日の授業は麻里のことを考えている間に終了。

放課後、わたしは職員室で担任の青井先生に聞いた。

「この学校の生徒のだれかが万引きつて、ほんとですか」

すると先生は手馴れた様子で、「そんなことはありません」と言っ
た、わたしの目は見ずに。

「先生」

「どうしましたか？」

「知ってますか、青井先生。嘘は相手の目を見ながらじゃ言えない
んです。たとえば言ってもそれはいつかばれる嘘なんです」

キーボードを打つ手がとまった。

先生の表情も固まっている。

わたしは今しかないと思い、

「おねがいします。教えてください先生」

頭を深く下げたわたしに、職員室にいる先生生徒、全員が視線を向
けたのを感じたが、本来他人の視線が苦手であるわたしののに、こ
のときだけはなぜか全く気にならなかった。

「なんか分からないけど、怖いんです。わたし、一回麻里の裏を見
ました。麻里のことを知っているから、これ以上悪くなつてほしく
ない。だから、麻里の事教えてください。お願いします」

本心だった。麻里を間違つた道に歩かせたくない、そのためにはわ
たし、どんなことでもできる。

「・・・・・・・・ちよつと来て」

先生はそう言うと、わたしの返事も待たずに職員室を出た。

わたしもそれについて行こうとする。そうしたら、案の定視線も一
緒に、わたしのところについてきた。でもわたしはそんなこと構わ
ずに、先生だけを見て歩いた。

先生は職員室を出て廊下をほとんど歩くこともなく、職員室の二つ

隣にあるドアを開けた。

「入って」

わたしは言うとおりに、まるで刑事の取調室のような場所につばを飲んで入っていった。

その部屋はなんだか中高生が勉強クラブで大忙し、というやつとはかけ離れた世界の空間のようだ。とても緊張した。部屋にはシンブルなステンレスの長方形なテーブルが一つ中央に、さらに背もたれのない丸い緑のイスが二つ、テーブルをはさみ向かい合うようにしておかれている。壁は白く床も白い。どんな些細な汚れでも簡単に見つかってしまいそうだった。

「座って」

先生は奥にあるイスに座ってから、わたしに促した。

本気で怖くなった。麻里がここにいればもつと怖くなるか全然怖くなくなるかのどちらかだろう、しかしどちらにしても今ここにいるだけで充分怖くなった。

絶対に麻里は、万引きなんてしていない。

そう少しでも、1パーセントでも信じていたから先生に聞くことができた。あと数パーセントあるだけでわたしは完璧に楽になれそう。そう感じわたしは麻里にもらったストラップのついた携帯があるポケットに手を入れ、それを強く握りしめた。

今なら間に合う。もう手遅れなのかもしれないけど、麻里はまだ、わたしの手の届くところにいる、と信じて。

「さっき言ったこと、本当なの？」

しばらくして、先生は口を開いた。

わたしは何もいえなくて、顔をゆっくり上げた。

「だから、さっき渡辺麻里さんが万引きをしたって……。そういう言い方みたいだったから、うん。もし先生の勘違いなら……」

「違いますっ。麻里は万引きなんてしてません」

わたしは、とっさに青井先生の言葉をさえぎった。

本当にこのまま突き進んでいいのか迷いながらも。

「わたしは……麻里をチクリにきたわけじゃないんです。そんなじゃないんです。わたしは、先生から聞きたいんです。万引き犯は麻里じゃないって、他の人だって。もうとくに犯人は見つかって厳しく怒られたって。そう言っただけじゃないんです。ただ、それだけなんです……じゃないとこのままだと、わたし……」

わたしは肩を震わせながら必死に言った。

もうこの日一日で一生分の力を使ったよう。

なのに先生は、

「そう」

と平然でつぶやいた。

ナニカガオカシイ。

さっき感じた恐怖とは違うものをわたしは覚えた。

ここに入ったとき取調室に来たように感じたけど、それは本当だったのかもしれない。

「渡辺さんも同じことを言ったわ。『香織は万引きなんてしない』って」

足の裏を床につけているのが落ち着かなくてビクビクしていると青井先生は、ため息をついてから言った。

改めて観察するとめがねの奥で光る先生の黒目がある。そこにスーッ、と麻薬の一時的な快楽と同じなのかもしれない感覚で引きこまれそうになって、わたしはそこからサッと目をそらした。

そして、

「麻里がわたしと同じことを言っただって、どういうことですか」とそのまま先生の方を見ない姿勢で聞いた。

「市村さん、あなたわたしに言っただよね。相手の目を見てうそはつけないって。そのことが本当なら、今さっき市村さんがわたしに

聞いた質問をわたしは受け付けないわ」

「・・・・・・・・」

「これを大人がよく言う平等というのよ」

じゃあわたしは不公平でいい。

わたしは誰よりも下でいい。

そう吐き出せたらどれだけ楽か想像しただけでも夢心地な気分になつてしまいそう。だからあえて、わたしは弱音を吐かないことにした。

負けたくはなかった。

先生が言っている意味は相変わらず分からないけど、それでもやっぱり自分の弱さを見せたらおしまいだと思つし今まで散々いじめられて嫌でも弱さを勝手につくらされてきた。

どうせなら経験から学んだ知恵はいかしたほうがいい。

それにしても、どうして先生はわたしに対してここまで厳しく接するのだろう。いつもは差別も偏見もない先生が、どうして急に変わったのだろう。

「一体何が言いたいんですか、先生」

今度は青井先生と面と向かつて言った。

視線を強くして、聞いた。

「市村さんに白状してほしいの」

白状する？何を？

「認めてほしいの、誘導されてじゃなくて自分から」

「・・・・・・・・認める誘導？ ということ。」

「市村さん、人は変わるのよ。だからお願い・・・・・・・・噓なんてつかないで」

わたしウソはつくけど・・・・・・・・先生が目を潤ませるほどのウソはつかないよ、ほんとに。

「あの青井先生わたし・・・・・・・・」

「『万引きしました』」

「・・・・・・・・」

「そう認めて、市村さん」

第4章・3話

「どうしてですか」

先に沈黙を破ったのは、わたしのほうだった。

「どうして、そうなるんですか。わたしは万引きなんてしていませんしもちろん麻里だってそうです。なのに、なんで？　・・・・・・・・」

青井先生は、教師じゃないんですか」

死にそうだった。すごく疲れて、死にそうだ。

「友永くんって知ってるわよね」

「・・・・・・・・えっ？」

「市村さんと同じクラスの、友永裕一くん」

知ってるもなにも、友永くんは唯一男子でわたしに暴言を吐いたりいじめたりしなかった子だ。麻里のようにいじめを止めてくれたりはしなかったけれど、それでもともてクラスメイトから信頼されていて、学級委員の投票も確か彼にほぼ満場一致で決まっていた。おまけに成績優秀スポーツ万能、どこをとってもすばらしいとしか言えないような人間の見本のような雰囲気。友永くんは放っているし、実際テストの点も運動会のリレーのアンカーも完璧としかいいようのないものだった。まさに、万引きなんてものとは、無縁の性格。そんな彼が、どうして万引きの話に関わってくるのだろう。しかもわたしが万引き犯と疑われている話に。

「あの、どうして友永くん、がこの話に出てくるんですか。だって友永くんはわたしと・・・・・・・・友達とかそういう関係じゃないしそれに、万引きなんてするような人じゃないし。たぶん麻里ともつながりがあるなんて思えないし、それに・・・・・・・・」

「どちらにしても」

青井先生は力強い口調で言った。

「どちらにしても、渡辺さんには友永くんの何かしらの関係があったと先生は思います」

「な、なんですか」

わたしの問いかけにしばらく間を置いてから、先生は話し始めた。

「『香織は万引きなんてしない』。渡辺さんが今日の昼休み、わたしに言った言葉です。そして昨日の朝、友永くんは『市村さんが万引きをしたところを、ぼく目撃しました』。そう言ったの」

よく、先生の言っている意味が分からなかった。

いきなり友永くんがこの話に出てきていまだに正直困っていた。

「つまり、渡辺さんはあなたの万引きを否定した。なのにどうしてもだか友永くんはあなたの万引きを肯定した。あきらかに矛盾してるの。これがどういうことを意味しているか市村さん分かる？」

「いえ……ただ、その友永くんがどうしてもいないわたしの万引きを……目撃したと言ったのか理解できません。だってしてもいないことを勝手にしたって噂されても。とても迷惑です」

「そんなやわなこと言ってる場合じゃないのよ。校長先生も教頭も、すっかり友永くんの言う事を信じてる。そりやそうよね。だって友永くんは模範の生徒だもの。とても渡辺さんに敵う相手じゃないわ」

「あの、先生？ おっしゃってることがよく分かりません」
本当は分かっていた。

簡単に解釈すると、近頃の大人は日頃の行いがよい生徒の証言を信じる傾向にある、ということだ。理由は分からないけどとにかく友永くんはわたしを万引き犯に仕立てようとしているらしい。それを麻里は懸命に否定してくれている。でも最初に述べたように、校長や教頭は麻里を信じず友永くんだけを信じている。

ここまで冷静にこんな考えができる自分に、述べたなんていう、なかなか中学生の会話で使わない言葉が浮かんだわたしに、鳥肌が立った。

「この学校は教育方針が厳しいの。それでも万引きは犯罪行為。一般的な公立校でも自宅謹慎が当り前。だからこのまま市村さんが万引き犯、なんていうふうに思われちゃったら……お

そらく、いや確実に市村さん」

「はい」

「あなたは停学処分よ」

停学。

この二文字は、『死ね』の手紙と同じくらいのダメージをわたしに与えた。

停学、というのはまさに停学だ。

停学になったらわたしはどうなるのだろうかと考えただけで、背筋にぞくつと寒気が走った。

学校がとりあえず楽しい今、これからしばらく学校に来ることを禁じます、なんて変な紙のようなものを親と共に呆然と立ち尽くす校長室で見せられたら一体どうすればいいのか。親がわたしに失望するのは別にいいけど、この先の未来が心配になる。

不安が渦を巻いて頭をパニックにさせた。

けど、それよりも一つホツとしたことがあった。

たとえ麻里が万引き犯だとしても、いやそんなことはないのだけけど、もし麻里が万引きのようなものをやったとしても、麻里が罪に問われることはない。ただ、そのかわりに友永くんという模範的な証言者がいるのだからかなりの確率でわたしはこのままだと万引き犯というレッテルをはられ、停学処分となる。

ピンときたようで、ピンときてほしくなかった。

「ありがとうございます、先生」

迷った末出てきた言葉はこれだった。

お礼を言うわたしに、先生は無言のまま目で問いかけた。

わたしはその問いかけに答えた。

「最初先生はわたしに脅すような言い方で話していたけど、でもそれは間違いだったんだって。やっぱり普段の青井先生は優しいからこういう緊急事態のときも優しいんだって、改めて思った。教師なんだって思った。わたしより絶対に友永くんのほうが真面目なのに、わたしと麻里の言うことを信じてくれて、とても嬉しかったです。

だから、ありがとうございます、青井先生」

言う事も冷静で素直だ、素直すぎる。

もしかすると、まだわたしは理解できていないのかもしれない。

何の関係もないはずの友永くん、恨まれるはずのない友永くん、万引き犯というとても低い位置に自分が落とされかけているということを理解してないのかもしれない。

いや、わたしはいじめられて精神的に強くなった。

これくらいのこと、負けたりはしない。

いつもでは想像のつかないくらい強気さに、わたしは戸惑ってなぜかとても不安になった。本当にこのままで大丈夫なのだろうか、と「こちらこそ、ごめんなさいね。つい尋問のような聞き方しちゃって。わたし市村さんを信じてるはずなのに」

「・・・・・・」

「言い訳させてもらうと、わたしあいにくまだ教師5年もやってないから、生徒の心なんて分かってるようで分かってないのよ、こればかりは自分でもいけないって思ってるんだけどね、なかなか直せない。それにわたし、生徒はみんな同じだと思う。だから、友永くんのこと信じてる。もちろん渡辺さんのことも市村さんのことも。わたし誰を信じればいいか、どうすればいいか分からなかったの。だから、100パーセント市村さんが万引きを否定できる意思を持っているのかなあって、それを確かめようと思って。それだけだったの・・・・・・それだけだったのに・・・・・・けっこうきつい事言っちゃったりして。本当にごめんなさい」

青井先生は頭を下げた。

「せ、先生。やめてください。それよりも、どうかしないと。誰が本当の万引き犯なのか調べるんじゃないで、この学校の生徒は万引きなんてしないっていう決定的な証拠を見つかるんです。そうすればわたしの無実の罪も晴らされるし、学校からもややこしい問題がなくなる。完璧じゃないですか」

奇妙なくらい頭が冴えた。

自分が天才的な弁護士になったような気がした。

本当に、いつからわたしはここまで樂觀的になったのだろうか。あまりにも不自然で、そう疑問に思った。なんとなくわたしの樂觀さは、今にもはちきれそうな感情を抑えようとする必死の樂觀さに思えてしょうがなかった。

自分に聞く。

「このままで、あなたは大丈夫ですか？」

第5章 - 1話

翌日、麻里は学校を休んだ。

その日季節は12月でもうすぐ冬休み、昨年新しく取りつけられた暖房がはたらいで教室の中は外よりまだ暖かく、冷たい感情も溶かしてしまいそうだ。

そんな中、青井先生の顔は心配そうに青ざめていた。

「渡辺さんは風邪でお休みです」

と先生が言ったときも、

「青井先生こそ風邪なんじゃないですかあ」

と生徒の一部がからかったくらいだ。

わたしはその理由がだいたい分かっていたけれど、あえて分かっているように自分の中で推測を押し殺した。

ホームルームが終わって生徒が授業の準備を始めるのを見てから、青井先生はわたしを手招きして呼んだ。

「実際は渡辺さんからは何の連絡も来てないの。お家のほうに念のため電話したんだけど、誰もでなくてね。渡辺さんの家共働きだからそれも当然なのかもしれないんだけど。なんか、不安なのよね。こう胸の辺りが騒ぐって感じかな」

そう心配気に青井先生は言った。

耳打ちされて、先生の声で震える空気がそのまま耳に入ってきて、それでもまだわたしは、危機感を感じていなかった。いや、感じないよう努めていた。

実はわたし、学校に登校してからずっと、一つのことに対してばかり考えていた。だから行動も思うことも全て、その執着する事柄にプラスになるものかマイナスになるものかしっかり判断してから口で言い、心で感じるようにしていた。

「このままで、あなたは大丈夫ですか？」

いくら聞いたってまともな答えが返ってくるはずない。

自分に優しく接したところで、どうにかなるわけもない。
気づいたらこう、悲觀的になっている。

感情の浮き沈みが昨日から激しい。

こんなのを、多感期っていうんだらうか。

この日の最後、3学期に予定されている席替えまで待てないとの生徒の声をうまく静めることができなかった青井先生は、急遽くじを作り始めた。しばらくしてできた、袋から取り出した番号と同じ出席番号の人が現在座っている席に移動する、という簡単な仕組みのくじびきを使つて、わたしたちは完全にこの席になるか全く予測不能の席替えをした。

結果、わたしの隣は友永くん、斜め前は麻里になった。

麻里が休みということであたしが麻里の代わりに引いたのだが、まさかこんな偶然あるのだろうか。いや、これは偶然じゃない。被害者、弁護人、警察、そういう身近な存在ながらも対立している複雑な関係になるよう、わたしたち三人はコントロールされていたのだ。
「渡辺さん、どうしたのかなあ」

ため息をつくように友永くんは、空いた麻里の席を見て言った。

間近で聞くとより透きとおっている声は、たとえどれだけ残酷な言葉さえも慰めの言葉と思つてしまひそうだった。この人が、嘘の情報を先生に流した。わたしを万引き犯だと偽つて、証言した。

「風邪、つて先生、言つてなかった？」

まともに見るのに耐えられないわたしは、独り言と友永くんにとられてもおかしくないほど小声で、机の隅にある1cmほどの深い傷を見ながら言った。

「そうかな。昨日、ぼく見たんだよ。渡辺さんが、先生と一緒に相談室に入ってくるの。あそこ、知つてると思うけど基本的な出入り禁止なんだ。先生の許可がないとあそこは使うことができない。実際あの部屋では秘密の話しあいがされているってうわさだから、たぶ

ん渡辺さんは先生に言ったんだよ、他の生徒に漏れてはいけない事実か何かを。知りたいなあ。渡辺さんが知っている事をばくが知らないなんてあまりにも不公平だよ」

「ねえ」

気づいたら、わたしは友永くんをにらんでいた。

分かりつつも抑えていた感情が、にらみとなって表れた。

きつくにらんでいるうちに目がパサパサ乾いて痛くなる。その目には、友永くんしか映っていない。周りの生徒の顔は、ジェットコースターに乗っている間通り過ぎていくだけの風景のようにぼやけ、そこにあるとは思えないほど薄い。ずっと彼をにらんでいると、涙が目の奥からにじみ出てきた。でもまばたきはできない。わたしの目はすでにまばたきという行動の存在すら忘れていた。

「ねえ」

わたしは聞いた。

「あなた一体何？」

周りの音も何もかもが耳に入らない。席替えでの歓声も後悔も共感も、全て消え死んでしまうようだ。目の神経しか働いていない。そう思えるくらいの無音の世界。

わたしの視線の先にいる彼は、にゅっと唇の端をゆがませた。

第5章・2話

屋上のフェンス。緑色の正方形の枠が網目になってできたフェンス。転落事故を防止するために付けられた、3mはある高い高い緑色をした網。その触れたら軽快な音がする壁に、今彼はもたれている。

「呼び出されたから来たけど」

友永祐一はのど仏を上下させた。

「なあに、一体どうしたいの」

上目づかいで問う友永祐一は、香織を思わず震え上がらせた。怖い、怖い。

全身の毛が逆立つ香織の皮膚は、ごく自然に恐怖を連想させる。

「ほら、なんとか言いなよ」

香織から数メートルしか離れていないにもかかわらず、友永祐一は中学生とは考えられないほどの威圧感を放っている。かなしばかりにかかったかのように、香織の足をはじめとする全身が、動こうにも動けなかった。

「さあ。ぼくを呼んだんだから、話があるんだろ。言えよ」

だんだん命令口調になる友永祐一に、先ほどまで開こうともしなかった口が徐々に抵抗しながらも開いていく。

「わたしなんとなく分かってた」

「はあ？」

「でも絶対にそれを表面上でも、自分の中でもあえて出さないようにしてた……。怖かったし、自分を保とうとしていたから。でももうやめる。麻里が無断で学校に来なくなってしまっなんて、もう耐えれない」

友永祐一の足元を見るので精一杯。

香織はそれでも話し続ける。

「わたし、青井先生から聞いた。全部よ、全部。わたし万引きなんてしてないのに、あなたはわたしが万引きしたって先生に言ったら

しいけど、ひどいよね、それ。拳句の果てには麻里は学校に来れなくなつて……。あなたのせいよ。わたしも麻里もあなたのせいで、傷ついたのよ」

「あのさあ、さつきから何言ってるんだよ。勝手にぼくが先生に嘘ついたみたいなの、ぼくが渡辺さんを学校に来れなくしたみたいなの、そんな言い方してるよな」

「そうよ、そんな言い方してる」

「正気か？証拠も無いくせに。悪いけど、今日塾があるんだ。きみの遊びに付き合ってるひまなんて、ぼくにはないんだ。もし塾に間に合わなかつたら、どうしてくれるんだよ」

「じゃあ最後に聞く」

力強い声で香織は叫んだ。

つばを飲み込む。喉が枯れている。

「なんで……。麻里を……。麻里をいじめたの」

香織の声は弱く、もろい崩れそうなものになった。

友永祐一の歯のギリリとした光が、屋上の床に反射して香織の目を焼く。

香織の目が閉じる。

頬に涙が、一筋流れた。

昨日。

「香織」

わたしが青井先生から万引きの件について聞いてから、帰ろうと靴箱で靴をはきかえていたとき。

麻里が、わたしを呼んだ。

振り向いた。

ぎよつとした。

手に持っていた上靴が、滑り落ちた。

麻里の顔があのとときのわたしに似ている。いじめられていたときの

わたしと同じように、ほとんどの事に対して無気力無関心でおまけに死ぬ決意すらまともにできない力の抜けた目をしている。

ただ、そこに怒りや恨みの感情は存在していなかった。

もうわたしはがんばった、これ以上何かしたってしょうがない。

あきらめを超えた絶望の表情。

「ど、どうしたの」

この時、まだわたしは麻里の万引きの可能性がゼロとの自信を持てていなかったため、「どうしたの」の後に「大丈夫？」という一言を付け加えることができなかった。

「香織は、わたしのともだちだよ」

「えっ？」

すぐに答えてあげなかった。

改めて聞かれて、わたしは自信を無くしていた。

本当に、わたしと麻里はともだちなのだろうか。

そもそも、麻里は最初好意を持ってわたしに接していなかったはず。わたしが友達のいない孤独な人間じゃなければ、きっと麻里は他のクラスで交友関係の少ない子を目当てにしただろう。なのにどうして友達か友達じゃないかなんて、今さらそんなことを聞くのだろうか。

わたしは少なくとも麻里を信頼してきたけど、一度裏切られてからはどこか全てを託すことができなくなっている。

だからといって、わたしと麻里の関係が途切れたわけでもない。

それでもともだち、と一言で表すほど簡単な関係がわたしと麻里にあるとは思えない。

いったい友達って、何なのだろうか。

疑問が根をはるように広がった。

「・・・・・・・・ともだち、じゃないかな。だって一緒にいることも多いし。よく話したりするし。そ、それにストラップ。あのストラップが何よりの証拠だよ」

「じゃあ・・・・・・・・ストラップが無くなったらわたしと麻里の関

係はどうなるの？」

白い比較的薄い携帯とつながったストラップの水晶を、麻里は指でトントンとはじいた。

「ちよつ、ちよつと麻里。わたしはただ、これがあるからわたしと麻里はここまでやってこれたんだって言いたかっただけで。だからそこまで深い意味は・・・」

「ねえ香織」

「・・・」

「わたし、どうしたらいい？」

麻里がわたしを頼っている。

薄皮をむいて現れた麻里の心の弱さ。噛んだら無音で砕けるクッキ―やつまむとすぐに砂となるやわらかい石よりもろい、心の弱さが痛いほどわたしに伝わってくる。身体で何か呼ばれた感覚をつかみとる。

その瞬間、わたしは気づいた。

人はそこにいるだけで誰かとつながりあえる。友達恋人兄弟姉妹。それぞれに対して抱く感情は当然違うし、価値観も全く違う。でもどれもみんな境はなく、自分を中心とした同じ円の中にいる。そこに誰かがいるから誰かがいるわけで、相手がいなければ今の自分はいない。だからこそ人は人に優しくしたり守ってあげたり、愛を与えたりする。

大切なことに、気づいた。

「どうしたらいいのかな、わたし」

「うん」

「なんで、こんなことになっちゃったんだろ」

「うん、大丈夫だよ」

「もうわたし逃げたい。隠れたい」

「分かるよ、その気持ち」

「ねえ香織」

「何？」

「わたしが本当の事話して、良いと思う?」

ダメだ。

泣いてはいけない。

でも、涙が止まらない。

人はどうして涙もなく、泣いてしまふときがあるのだろう。

悲しみがあるから希望がある。

そうであればいい。

本当に、そうであってほしい。

「これ話したら、わたし傷つけられないかなあ」

「うん、大丈夫」

「大丈夫?」

「うん。絶対に大丈夫」

わたしに今出来ること。

それは、この際うそも何でもいいから全てに100%の自信を持つて麻里と接し、支えてあげること。

「いじめられてるんだ、わたし」

麻里はあえてそうしているのか、飛びっきりの笑顔で言った。でもわたしには分かった。少なくとも、一度経験したわたしには分かった。強がっている、麻里は、強がって寂しさをごまかす。なんとなく、わたしに似ている。心が強いのか弱いのかさえ不明な強がりというものが、麻里の笑顔を作り上げていた。

第5章・3話

「ふうん。それでどうだったんだよ。渡辺麻里さんは本当にいじめられていたのかよ」

友永祐一は平然と言った。

「そう簡単に……簡単に使わないで。いじめっていう言葉は繊細なの。その一言だけなのに敏感に反応して、あなたは違うようだけど人によっては怖くなったり怯えたりするの。だから、適当に口から出さないで。あなたみたいな人がいるから、麻里は……」

・・

「ということは、渡辺さんはいじめられてたんだな」

「あなたのせいよ」

「はあ？」

「あなたのせい」

「だから何だつて」

「わたし今までのことを麻里から聞いたの。あなたに口止めされていたこと全て、麻里はわたしに話してくれた。万引きの事も、いじめの事も飾らずに」

「あつ、そう。それじゃあ聞かせてくれないか、市村さん、その真実っていうやつを」

香織が友永祐一追いつめることに徐々にあらわになっていく彼の本性。それがリアルすぎる近くの位置にあることが、香織の喉を詰まらせる。肩に恐怖がのしかかる。

「……半年前」

「な、何？」

「半年前、友永祐一は何をしたか覚えている？」

「さあ。分からない。ああ、それがいじめや万引きに関係するのか。でもぼくはしてないよ、そんなこと」

「……覚えてないんだ」

「いや、覚えてるとかじゃなくてやってないから」

「じゃあ、話したくないけど、話す」

わたしは半年前の 靴箱に入っていた「死ね」の手紙から始まった地獄の日々から、少しずつ胸が苦しむことを承知で今日のこの日までの時間を思い出す。辛いのに容易く思い出せる。思い出したらもう、一気に出てきて止まらない……。

……。過去を振りかえることは嫌い。特に苦しい過去ほど嫌い。でもその過去が思いとは逆に記憶からよみがえり心を、心を締めつけなかった日は一日たりともないはず。それがどれだけ涙が出るほど辛いものとしても、勝手に過去は人を苦しめてしまう。そうなのだ。

本当に耐えがたい過去ほど人は、忘れることを恐れ拒むのだ。

第5章・3話（後書き）

本当に耐えがたい過去ほど

人は、忘れることを拒む

自分でも書いていて、意味深だと思いました。

正直、この言葉の意味は自分でも分かりません。

しかし、とても大切なことのような気がして、

このような後書きを書きました。

今月下旬にはこの小説も書き終えると思うので、

最後まで読みたい、という方は

ぜひ最後を期待して読み進めてもらえれば嬉しいです。

第6章 - 1話

半年前、いやそれ以前からわたしは孤独だったし、故にわたしはいじめられさらに独りになった。やがて麻里と出会い仲良くなりいじめもなくなり、しかし麻里に一度裏切られわたしは復讐を決意した。でも結局いつのまにか復讐心は消えて終了、今までの関係により新鮮さを加えたつながりを取りもどした。

そう。簡単に言えばそう。でもわたしは表しか見ていなかった。その裏にある麻里の苦しみを、全く分かっていなかった。自己中心。

わたしは視野が狭かった。

「いじめられてるの、わたし」

麻里の言葉に、わたしは言葉を失っていた。

「あとね、わたしうそついてた」

「うそ？」

「うん。ずっと、香織にうそついてた」

「.....」

「あ、でも心配しないで。今から言うことは本当だから」
本当でもうそでもどっちでもいい。

ただ、無理に笑わないでほしい。

出来る限り笑顔でいようとさっきから尽くしている麻里を、わたしはこのままだとずっと直視できないかもしれない。自分の心の中をのぞいているような気がするから。今まで精神が崩れないように必死で負けてはいけなさと自分に言い聞かせひたすら強がりでも実際は相手がいたからやってこれた、というただただ役立たずの自分を見ているようで嫌だった。決して麻里をそんなふうに思っているわけじゃないけど、でもどこか重なって見えた。そのぶん、わたしは

麻里に深く共感できたしそれに麻里の頭をなでてあげたいと思った。
「香織って小学生のときどんな感じだった？」

小学生？

「うん。わたしと香織、違う小学校通ってたでしょ。だってわたし初めて香織のことを知ったとき、誰か分からなかったもん」

わたしも、分からなかった。

「じゃあ教えて……あ、普通はこういふとき提案したほうから言うんだよね。うん、そうだよ。あのね、わたし、小学校の時からずっと一人だった。そのときはいじめられなかったんだけど、なんかこれ、っていう相手がいなかったの。何て言うのかなあ。難しいんだけど。うーん、違いかもしれないけど、嫌われはしなかったんだけど気にされなかったって感じかな」
それって……グリーンピース？

「えっ？グリーンピース？ああ、あの緑の丸いやつか。小っちゃいよねえ、あれ。それにあんまりおいしくない。なんとなく苦いんだよね。でもいまいち嫌いな食べ物としての意識はなくて。存在感があんまり無いからな」

ねえ麻里。

「何？」

「吐き出しちゃっていいよ、全部」

「……………」

「そうしないと、一生苦しむことになる。感情的になつてよ。無理に笑われたって、逆にこっちが悲しくなるよ。だからさ、お願い。わたしに全部ぶつけて。受け止めてあげるから」

沈黙が続くその後、麻里は泣き崩れた。

疲れきって、何も残っていないような麻里に、わたしは何か慰めの言葉を言う前に……肩に手をまわして抱きしめていた。泣き叫ぶ麻里の口元での声がわたしの耳でこだまして苦しい。しばらくしてから、麻里は全てを話し始めた。

第6章・2話

「小学生のときはなんとか我慢できてたの。でもわたし、中学校に入学してからもつと孤独になったから。しょうがないんだよね、こういうのは。運命なんだよ。でもやっぱり運命っていう言葉じゃ片付けられないくらい辛かったことはあった。わたしの居場所はあるようで無かったの……。ずっと自分がいる感覚が分からなかった。話しかけて無視されることはなかったけど、誰もわたしを仲間に入れてくれたりいっしょに笑ってお喋りしたりなんていう風には誘ってくれなかった。で、そのうち自分から皆との距離を遠くするようになった。すっかり臆病になってたの。」

でも……。でもずっと疑問に思ってた。なんでわたしばかりこうなんだって。ねえ、どうしてだと思っ、香織。わたし何も悪いことしてないんだよ。なのにいつのまにか、2学期に入ったときからはすっかりいじめられるようになってた。6、7、8月の暑さでたまったイライラがみんな、爆発しちゃったんだろうね。でもさあ、わたし分らない。登校してきた瞬間『消える』とか『うざい』とか言われて……。意味分かんない。学校にいる間の一秒一秒はただの地獄なの。全身震わせて、下向いて、警戒して、周りを見るたびに心臓が痛くなつて怖くなる。不公平じゃんねえ、香織。こんなの、こんなの不公平だよ……。――」

麻里は一旦口を閉じ、そしてまた開いた。

「それで探したの……。同じ思いを味わっている人。共感したかった。わたしの気持ちを少しでも分かってくれる人が身近にさえすれば、もう充分だった。で、見つけたの、香織を。香織はわたしがいじめられる前から、そうだったでしょ。だから接触した。じゃないと、誰かに声をかけるなんて勇気わたしからは出てこない。そうしたら、香織はわたしと仲良くなってくれた。ものすごく嬉しかったんだよ、ここまでの優しさが人間の中にはあるんだって、本

気で感動した。だからわたし、あんなストラップを香織にあげた・
・・・もう絶対に離したくなかった。香織はわたしより大切な宝
物だったから。自分の弱さを見てしまう気持ちを紛らわすには、誰
かといっしょにすることが一番だって気づいてたから、もう香織を
失ったらわたしはおしまいだと思った」

少し分かる、麻里の気持ちが分かる。そんな気がした。

「香織と親しくなつて得したことは、何よりみんながわたしを普通
として見てくれるようになったこと。わたしに友達ができたたん
誰もわたしにひどいことをしなくなったの。わたしそのうち香織が
いじめられているのを注意するようになって・・・・しかもみ
んなが素直にいじめをやめるようになって、ものすごく得意な気分
だった。

でも、そう現実には甘くなかった。やっぱりわたしがいじめられてた
つていう過去は消えないんだって・・・・実感した。ある人か
ら、生意気だとか、調子に乗ってるって思われてたらしくてね。わ
たしは・・・・わたしはただ、今まであれだけ苦しんだんだか
らちょっとくらい主人公になったっていいんじゃないかって。別に
欲ばりになつてもいいんじゃないかって。思いたかっただけなのに・
・・・・なのになまたわたし・・・・」

さつきと同じように麻里は下を向いて一瞬黙った。

それから、全ての胸のとげを、痛くても我慢しながら、最も取りや
すい位置に動かすかのように、ゆっくり取り除いていくように話し
を再開した。

「次のやつはひどかった。クラス全体のものとは違って、今度は一
人から受ける威圧的なものだった。でね、それがね、友永くんだつ
たの。友永くんが、わたしにこう言ったの。『今すぐ、市村香織を
手放せ』って。『何をしても、市村香織を傷つけてでも、縁を切
れ』って。わたし『どうして』って聞いた。そしたら友永くん、『
あいつが上手くいってるの見てるとイライラする』って。そう言っ
たの。香織が、わたしと仲良くするのを嫌がってたみたい・・・・」

・。

わたしものすごく迷った。だってね、友永くんものすごく怖かったんだ。言うとおりにしなかったらわたしがとんでもない目にあうかもしれないし、もしかしたら香織に何かが………っていうふうに怖かったの。でもせつかく手に入れた香織を自分から手放すなんてこと嫌だったし、それに何より香織はわたしの宝物だから………宝物はきれいに磨かないといけないでしょ。ヒビなんて入れちゃいけないでしょ。だから迷った。なのに………迷ったのにわたしは決めた方向を間違った。何日もずっと考えたのにね。バカだよ、わたし。だからってあそこまで言わなくてもよかったのに。香織はいてもいなくても同じだって、香織のこと市村さんって呼んだりわたしを渡辺さんって呼ぶように強制したり。ひどいよね、わたし。最低だよ………最低。あれだけ香織を傷つけたのに、なのに香織はわたしと絶交もせず………。

どうせなら突き放せばよかったのにね。二度とわたしの顔を見るのも嫌になるくらい、徹底的にやればよかったのに。ごめんね、中途半端なことしちゃって。香織には一切迷惑かけるつもりじゃなかったの………ごめん、言い訳だよ、こんなの。でもわたし謝らないといけないんだ。あのね………謝らないといけないの。麻里はわたしのほうを見てはうつむき、見てはうつむきを繰り返して震えながらもわたしを最後にはきちんと見た。そんな苦しい麻里を、わたしはどうしても直視できなかった。

「万引きしたのね、わたし、万引き、したの。昨日、駅前のデパートで………命令、されたの。友永くんに命令されたの。」おまえはおれの言うとおりにしたが、どうして現在も市村香織がおまえの近くにいるんだ。おまえは約束を破ったのか。じゃあ、それ相應のことはしてもらわないとな。そうだ、万引きでもしてもらおうか。まずは手始めに文房具か何かを盗ってこい。ああいう小っさいのがすんなりとできるようになれば、そのうち何万とする服だって盗れるようになるさ。大丈夫、安心しろって。おまえが絶対につか

まらなくなるまで教えてあげるから』。

わたし、いやだって言えなかった。拒否したら、もつとひどいことされるって直感で感じてた。だから従ったの。そしたら店員に見つかってね。わたし、これ以上に無いってくらいがんばった。なんとか必死に逃げきってわたしは盗ることに成功した。でも友永くんはその盗った消しゴムをひったくってね、こう言ったの。『素晴らしい。君には万引きの素質がある。明日こそは、ぼくが注文したものを盗ってくれ。分かっているだろうな。従わないと、ひどい目にあわすぞ』って。遊ばれてた。わたし、友永くんの良いように使われたのよ。しかもその後友永くん『この万引きは市村香織がやったことにする。おれが証人になって、市村香織を完璧にめちゃくちゃに潰す』って言ったの。ハツとした。わたし気づいていなかった。友永祐一は賢いんだって、頭だけはいいんだって……。気づかなかったせいで、わたしのせいで……。わたしのせいで香織はやってもいない万引きの疑いをかけられてしまったの。だから「ねえ麻里」

これ以上麻里に話し続けられたらわたしは罪悪感を覚えてしまう。麻里に何の利益もない悲しみを与えてしまう。他人の心をわたしの身勝手さで揺さぶってはいけない。

わたしは、麻里の肩に手を置いた。

「何……」

「悪いのは全部あいつだよ、友永祐一だよ。麻里は悪くない。だから、そんなふうに自分を責めないで」

何か違う。

そう感じた。

わたしは、言葉をいつも本心から使っているのだろうか。

友永祐一に全ての責任を負わす、ということは麻里にとっては良いかもしれないがわたしにとってそれは正しい事なのだろうか。

一瞬疑ったけどすぐに、わたしは何よりも麻里のためになっているんだと思い直した。そして……もう一度麻里を抱きしめた。

第6章・2話（後書き）

これまで毎日更新し続けてきましたが、明日は更新できなさそうです。

もしこの小説を楽しみにしている方がいるのなら、数日ほど待つていただいてももらいたいです。よろしく願います。

第7章 - 1話

わたしは麻里に代わって友永くんに話した。

かつてはわたしがなりたくないと思っていた負けの象徴ともいえる不登校児になりつつある麻里に代わって。話しているうちに、わたしは友永くんに対しての怒りよりも自分がどうして麻里が抱えていた悩みに気づいてあげられなかったのかという、どうしようもない自分に対する後悔の怒りのほうが強くなっていた。

そして、わたしの中で一つの思いが崩れ、同時に新たな思いが生まれた。

後悔は人を成長させる。

「だから友永くん。もうやめて、こんなこと」

わたしは一言言って、屋上を去った。

俺は、何をしていたんだ……。

市村に言われて、俺はやっと目が覚めた。

今まで渡辺にひどいことをしていたことに、やっと気がついた。

思えば、あのときだった。俺が施設に預けられることがなかったら、こんなふうに自分が悪い人間に成長することなんてなかったはずだ。環境を責めるのはよくないけれど、今はそれでもしないとやりきれない状態だった。

自分が、自分じゃない気がずっとしていた。今ここにいるのは、本当の自分なんだろうか。それとも、仮面をかぶった嘘の自分なんだろうか。答えの見つからない疑問がいつも頭のなかでうずまいていて、心が痛かった。

でも、さっき分かった。自分は自分なのだ、と。

自分がどういう人間であれ、それを行ったり考えたりしているのは他人ではなくて自分。それを認めるかどうか、大事な分かれ道だ。

今まで俺は弱い自分から逃げてばかりで、そんな卑怯な自分が嫌で誰かに当たりたくなつて、それで渡辺にひどいことをしてしまった。渡辺だけじゃない。市村も、傷つけてしまった。

．．．．．やり直したい。

俺の中で、その時何かが変わった。

第7章・1話（後書き）

友永の中で、何かが変わった部分。

これは全て更新する直前に付け足したもので、少しまとまっていなかったかもしれません。

ただ、思うとおりに書いたので、

それがうまいこと伝われば嬉しいです。

また、更新がいつもより遅れてしまいすみませんでした。

第7章・2話

上靴を脱ぎ、パカンという高い金属音がする靴箱に手を伸ばし、そして開いた。上靴をその中に入れると同時に通学靴を地べたに放り投げる。つま先をとんとんとして、かかとまで25センチの足を革靴に入れる。

この行為をするたびに靴箱を見るたびに、わたしは今でも身震いして思い出す。

いじめの恐怖、人間の恐怖、を初めて実感した瞬間。

「死ね」と簡単に使う人間の心は、あの日以来わたしの中に置かれたままになっている。麻里が脅されてわたしの悪口を言って、それを真に受けた中学生のわたしが復讐というものを決意したように人は、何か衝撃を受けたとたんどつ豹変するか分らない。友永くんだってきつと、そうなのだ。友永くんにだって、何か理由があるに違いない。

人間の心は怖く、そして毛い。そのぶん一発の威力はすさまじい。わたしは身を持って実感している。

ピピピピピピ・・・ピピピピピピ。

胸ポケットにあるケータイが鳴る。なぜか動じてしまった。突然誰もいない周りの沈黙に人間からは出せない機械音が入ったからだろう。とりあえずそういうことにして、わたしは弱くブルブル振動しているケータイを制服の胸ポケットから取り出しパカッと開いた。画面を見る。

「ま、麻里っ」

思わず声に出して驚いてしまった。

ケータイの画面に、麻里の名前と電話番号が表示されている。

その間にも麻里からの着信を知らせる音は寂しく鳴り続けている。

一定のテンポだからこそ感じられない焦りが今回はどうしてだが、とてもリアルに伝わってくる。もしかしたら、この焦りはわたしの予感からきているものなのかもしれない。ケータイの画面にうつる麻里の名前と電話番号、そのケータイから発せられる着信音。わたしは、自然と思い出していた。

渡辺さんから何の連絡も来てないの。

なんか、不安なのよね。こう胸の辺りが騒ぐって感じかな。

ここに青井先生がいたら聞きたい。

今わたしが感じてる胸のざわざわは、先生の不安と同じですか？ 同じだとしたらわたしはすぐさまケータイのボタンを押して麻里と電話を通してつながっていたし、もし違っていたとしても今日学校を無断欠席した麻里からの連絡、すぐに応答しないといけない。

通話ボタンを押した。

耳にケータイを当てた。

無音。

「・・・・・・・・もしもし」

音が全く入ってこない、静寂さのあまりなかなかこの一言を出すことができず数秒戸惑ったが、きちんとわたしは言った。それも、何か嫌な予感がしていたからだった。ケータイの固い感触がやわらかい耳の皮膚を刺激する。なのに、肝心の麻里の声や息遣いが、敏感に働こうとしている鼓膜に届いてこない。

息が出来ない状態。

死。

呼吸もせずわたしは口を閉じていた。

わたしはたまらなくなり走り出した。

ケータイを切る余裕すらなかった。

さっき感じた胸のざわめきと嫌な予感が当たっていませんように。麻里に何も起こっていませんように。

ただそれだけを願いながら走った。

周りの風景も音も何も見えないし聞こえない。

あまりの自分の足のスピードについて行けずいつ転けてもおかしくない。

そんなことはどうでもよかった。

無意識に最悪な状態が想像される。麻里がどこか高い建物から飛び降りる姿、薬を大量に水で飲む姿、赤信号構わず車道に出る姿……

……とてつもなく怖い。

失う。

一瞬にして失う。

嫌だ、一緒にいた人がいなくなる。

ありえない、ありえない。

そんなこと起こらないに決まっている。自分は思い込みばかりしているマイナス思考の人間だ。当たらない思考ばかりしている、バカな頭をした人間だ。

今回もそうだ。

そうじゃないとおかしい。

だって、昨日わたしの手の中には、確かに麻里がいたから。麻里の温かさがあつたから。それが無くなるなんて考えられない。

アスファルトの道を走ったり角を曲がったりしているうちに、麻里の家が見えてきた。麻里の家にはあれから何度か遊びに行ったこともあったから、それで道順を覚えていたのだ。やがて『渡辺』と彫られた表札のある見た目新しい二階建ての家にとどついた。インターホンの四角いボタンが、とてつもなく近距離で目に迫ってくる。これ押し、麻里が出てくれれば不安は取り除かれる。分かっていた。でも、なかなかそれができない。躊躇してしまう。いつものことだ。慣れた迷いはやけに気分を落ち着かせるが、しかし逆に苛立ちが募る。どうしてわたしはここまで不信なのだろう。自分に対しても誰かに対しても、はつきりと全てをゆだねられない。悔しかった。思い通りにいかない自分が悔しい。モヤモヤする。こんな思い

してる場合じゃないのに、なのにすぐに行動に移せない。

「市村さんっ」

呼ばれた。

そのとき、初めて涙を流している自分に気づいた。

慌てて指先で涙をぬぐう。

完全にさっきまで泣いてた証拠は消したのに、なぜか振り向いたらそれがバレてしまいそうだったから、呼んだ相手がこっち側に回ってくるまで両手で顔を覆い、下を向いて待っていた。

第7章・3話

「・・・・・・市村さん？」

どこか聞き覚えのある声。

というより、わたしはついほんの数十分前かそれくらいに、そいつと話した。

「と、友永・・・・・・」

全部あんたのせいよ。

あんたさえいなければ、わたしも麻里も普通に出会えてたのに。いや、もしかすると友永祐一がいたからこそ、わたしたちは巡り会えたのかもしれない。そもそも、麻里がわたしに最初声をかけたのは、ともだちのいないわたしと思いを分かち合いたかったからであつて、友永祐一が麻里をいじめなかつたらわたしは、麻里と知り合えてなかつたのかもしれない。

ついついそう思うと、どうしても友永祐一を本気で憎めない。

いきなり心を、そんな感情がざわつかせる。

「友永くん、何、今ごろ・・・・・・謝りにきたの？」

わたしは友永祐一のひざ辺りを見ながら聞いた。

「いや。ただ、さあ。悪いなあって。二人に悪いなあって」

「だから、それを謝るって言うんだよ」

今なお心を揺らす思いを、口の言葉でかき消そうとした。

「あ、そうなんだけどさ。でも、おれ市村さんの言う事を聞いていたら、だんだんひどいことしたなあって思えてきてさ。おれ、昔から自分がそういう人間だって分かってたんだ。後悔先に立たずっていうやつ？ちよつと違つかもしないけど。でも、後悔したって変えれないことはたくさんある。だから、おれは時々人から見れば悪魔みたいに思えてしまうのかもなあって」

「うそ」

「えっ」

「どうせ、それも口先だけなんですよ。あんたは、ついさつき本性を見せた。人間の裏を中学生のわたしに見せた。けっこう辛かったんだから。だから、わたしはもうよっぽどのがないとあんたの言う事を真に受けない。これくらいのこと言われることくらいは覚悟して、ここまで来たんだよね」

自分でも言つてて思った。

なんで、わたしは現実から目をそらすのだろう。

今すべきことはこのインターホンのスイッチを押して、麻里の無事を確認すること。無事ならそれでいい。またわたしの思い込みだったとしても、それでいい。麻里がいるなら充分。そう考えているのに、やっぱりわたしはこんなふうにそらしてしまう。例えば今のうちに、いつのまにかわたしは友永祐一に八つ当たりしている。こんなことしたって何も変わらないのに。

最低なのは、友永祐一でももちろん麻里でも青井先生でもなく、他にもないわたし、市村香織13才少女。こう認めさえすれば、全て変わりそうな気がする。でもできない。自分一人じゃ、どうせ何もできない。

「分かつてる」

「・・・・・・」

「分かつてるんだよ、おれ。市村さんにも渡辺さんにも、到底許してもらえないって。だから、何かそのぶん力になりたくて。そうだ、そのケータイ貸して」

友永祐一はそう言つと、素早くわたしの手からケータイを奪い取り、電源が入れたままになっていたケータイを滑らかに操作し、あつというまに電話をかけた。

「どこに、かけてるの」

「決まってるじゃん、渡辺さんのところ」

「で、でも・・・・・・麻里の家はここだよ」

「苦しんでんだろ、渡辺さん。そうだよ、おれのせいだよ。おれのせいで、渡辺さん不登校になりかけてるんだろ。そんな状態の人

間が、誰からか分からないインターホンの音に反応して上手い具合に出てくれると思うか。おまえ以外の人間と会いたいなんて、思っ
か……」

泣いている。

友永祐一が、友永くんが泣いてる。

目をいっぱいに潤ませている。

言葉が出なかった。

この人は、本物だ。

彼を疑っていた自分が間違っていたことに気づき、胸がキュンツと痛んだ。

「あつ、もしもし！？おい渡辺、家の中にいるのか？」

「ちよつ……ちよつと友永くん、麻里、出たの？」

「あ、ああ。で、渡辺、どこにいるんだ、今……えっなんて？聞こえないんだけど……いや、渡辺の声が小さいんじゃないくて……そう。周りがうるさい。もしかして街中かどこか？迷ったんだったら探しに行くけど。それとも駅……じゅ、１０階！？」

「友永貸して」

わたしは呼び捨てで呼んだ友永からケータイを強い力でひったくっていた。寒さでかじかんだ手が動揺と恐ろしさのあまりブルブル震え、ケータイをうまく持てない。それでも両手でどうにか支え、わたしは麻里と声だけつながったのだ。

「麻里、麻里！どういうこと？１０階ってどこ？」

返事はない。

ただ、都会より少し静かな騒音だけが聞こえる。

「ねえ麻里っ！麻里ったら！」

「貸せ」

今度は友永がケータイをわたしから取った。

「おい渡辺。絶対に、絶対にそこから動くなよ。おれのせいだ。謝る。だから……お願いだよ。死ぬな、死なないでくれ。と

りあえずそこに座つとけ。何よりおまえの友達の市村が心配してんだよ。だからさあ、頼む。おれのことなんて、おれのことなんて許さなくていいから、とにかく待っている。助けに行くから」

冬なのに汗が出てきた。

怖い。

怖すぎる。

足が、体の全てが拒んでいる。

「行くぞ市村」

動けない。

動こうとしても、足が言うことを聞いてくれない。

「こんなところにいたってしょうがねえだろ。渡辺がこのままどうなつたっていいのかよ。おれ今さらこんなことするなんて、どうかしてるし最低だよ。自分でも最悪だつて感じてる。でもさあ、いまだに躊躇してる渡辺も、おれはどうかと思う。

おれさ……。おれ見てたんだ、職員室でおまえが先生に頭下げてるところ。あの時はバカだなあつて、おれの思うつぼにはまってるなあつて笑つてたけど、今なら言える。おれ、本当はおまえが誰かの役に立ちたいつて望んでること。友達なんだろ、おまえと渡辺。だつたら助けてやれよ。友達のために先生に頭下げるくらいのプライド捨てられたなら楽勝だろ、これくらい。それにこのままだつたら渡辺……。何しかすか分からない。それでもいいのかよっ！」

良いわけない。

麻里がどうにかなくて、良いなんて全く思わない。

けど、わたしは臆病だから。

先生には頭下げたけど、行動力はない、臆病な人だから。

「渡辺にはおまえしかないんだよ。友達がいなくておまえが渡辺しか頼るものを持つてなかったように、渡辺もおまえ以外を必要としてないんだよ」

友永の言葉一つ一つが胸に突き刺さった。

わたしはバカだ、麻里をいじめていた友永よりも麻里を分かっている。ただ、麻里がいることだけに意味があると心のどこかで考えていたから、麻里そのものを一人の人格として見ていなかった。

わたしは麻里を助けられないといけない。

臆病でも、何かできるかもしれない。

「行こう友永」

「い、市村……」

「早く行かないと。ぐずぐずしてる場合じゃないよ。ほらっ、友永っ、つつ立つてないで。お願いだから早くっ！」

「あ、ああ」

わたしと友永は、ゴミ収集所に運ばれ終えたもはや原型さえ満足にとどまっていけないであろう、行方不明になった大切なアルバムを探し出すかのように走った。必死で麻里の姿を探した。こういう時は普通相手が行きそうな場所、というのを重点に置いてそこをくまなく見るのだからうけれど残念な事にわたしは麻里のそれを知らなかった。たとえ知っていたとしても、そこが10階建てかなんて分かりもしないだろう。

改めてわたしは自分を嫌った。

麻里の心を知らない己を憎んだ。

だから、手当たり次第に走り続け麻里の名前を呼んだ。今感情に振り回されていたら、現状がどう悪化してもおかしくない。

学校の屋上、というのも一瞬考えてみたけれど、あそこは高い、友永が今日もたれていたフェンスがあるから……飛び降りることができない。可能性としては、この辺りから500メートルほど進めばある高い建物。いくつかのその中のどれかでなければ、わたしはどこまでいけるか限界を決められなかった。それくらい本気、わたしは本気だった。

走る。

足の筋肉が痛い。

でも、心のほうがもつと痛い。

昨日からずっと痛かった。

麻里がいじめを告白したときの泣き顔を見てからその後、ごまかすことのできない不安定の感情が一秒一秒、時計の針が動いたたびにズンツと響き続けていた。言葉で説明してはいけないと思うほどの罪悪感。他人に抱く怒りと恨み。二つが交差して不安定だった。迷うときには必ず何かが交わっている。そうでなければ誰も悩まないし思うとおりに動けちゃう。麻里はその中間地点にいるのだ。苦しすぎる。心臓の中身をえぐられるくらい恐ろしくて痛い。一旦どちらかに揺れ動いてもまたちようど真ん中に戻り、今度反対側に傾いてもまた戻る。周りが変わらない限り続く永遠の繰り返し。心のシーソーに乗ったそのとき、よほどのことがないと降りられない。時間と空気の重さがピタリとうまい具合に混ざらないと、心はどちらか一方に傾き続けてはくれない。

わたしはそのことを実体験し、身に染みているから本気なのだ。

だから、痛くても走れるのだ。

「おい・・・・・・・・あの子大丈夫なのかよ」

不意に、そんなことを言う声が聞こえた。

足が止まる。

ゆっくりと上を見上げる。

10階建ての古いマンション。

その頂上の角。

柵もフェンスもない危険なそこに、

麻里は立っていた。

第7章 - 4話

風一つ吹けば、麻里がどうなるか。

もはや、想像する必要もなかった。

「麻里………麻里っ！麻里っ！」

「渡辺っ、おいっ、渡辺っ！」

わたしと友永の叫びは人ごみの声でかき消される。それでも大声で、何度も何度も麻里の名前を叫んだ。もうわたしと友永はいつ泣きながら死んでもおかしくない状態だった。

なのに、無関係な見物人が邪魔する。みんな自分の見知らぬ人間だからこんな風に平気で心配できる。といっても全てがこの人達のせいというわけではなくて、それでなくともここからの麻里との距離は遠いから、静寂の中だとしても声は届かない。

「麻里っ今行くからねっ」

聞こえなくても、伝わると信じてそう麻里に向けて言ってから、わたしと友永はマンションの屋上へ続く階段を駆け上った。エレベーターを待つてる時間がいやで階段を選んだ。

一段一段が重い。だとしても、止まるわけにはいかない。一瞬でも早く麻里の近くに行つて言わないといけない。わたしは麻里が大好きだし大切な友達だよって。だから、あきらめてはいけない。疲れを感じなかった。全くといっていいほど、途中で他の何かを頭がよぎるなんてことはなかった。

気持ちだけで人は限界を超えられる。

わたしは自ら思い知った。

コンクリートの冷えきった階段を上り上った末、そこには広いねずみ色の床があった。

殺風景。

その何も無い虚しい場所で、一人の中学生が空を眺めている。後ろ姿だけの影が伸びた、表情が見えないその子の名を、わたしは

乾いた喉で呼んだ。

「麻里」

呼んだ。

「どうしたの、こんなところに来て」

振り向かずに麻里はそう言った。

あまりにも幼い強がりの声に、胸が締めつけられた。
14才。

まだ14年間しか生きていない、言い換えれば14年もの長い間ここまで生きてきたのかもしれない、そんな麻里。

麻里の表情は今、苦しんでいるだろうか。それとも、また前のように無理に我慢して笑っているのだろうか、涙が頬を伝っているのだろうか。無表情かもしれない。

どちらにしてもこの微妙な回転を繰り返す時期。

わたしは共感できた。

どうしても常にある不安をごまかすために演じてしまう。よく分かった。そのぶん痛んだのだ。一緒に気持ちをわかちあうというのはこういうものだ。1つの大きな塊、苦しみの塊を半分に分けて互いに支えあう。だから、わたしが今感じてる胸の痛みは麻里がこれまで抱えてきた痛みの半分かそれ以下。その程度なのだ。だからって死んじゃっていいの？

わたしだけでは麻里以上の重みを背負う事はできないの？

麻里の背中を見て聞いた。

瞬間、麻里がほんの少し空中に身をゆだねたように見えた。

「ダメッ！」

わたしは麻里のところへ足を伸ばした。

ほんの数歩先の位置だった。

一歩一歩のたびに固い床と靴底が当たる感触がある。あと半歩。もうすぐそこにある。手を伸ばす。10センチ。5センチ。あとちょ

つと。1センチ。触れそうになる。……………手が届く……………
・後もう少し……………。

届いた。麻里の肩に、手が届いた。あった。麻里はいた。感触がきちんと感じ取れる。まだほんのり温かい。生きている。引っぱる。抵抗は全くなかった。二人そろって、地べたに体から倒れこんだ。背中が一瞬痛んだ。ゆっくり目を開ける。麻里の額が目の前にある。……………助かった。

麻里は助かったのだ。

わたしは思わず麻里をそのままの姿勢でぎゅっとした。

「嘘……………」

ぎゅっとした。

麻里の温かさが普通より格段にぬるい。

体温じゃなくてもつと、心の温度が低いのを感じたのだ。

この冷たさは麻里の深い傷を表しているのだと思うと辛かった。

「渡辺……………市村」

友永がそう名前を言う。そして、友永の足の力が抜けて地面に崩れるドンツという音がした。

「ほんとによかった……………」

表情の分からない友永は嬉しそうにつぶやく。

わたしはコンクリートの上で涙を流すことなく泣いていた。

麻里はちゃんとここにいます。助かった。安心があった。でも、同時に悲しみもあった。心でしか説明できない言葉を使って表現できない感情。わたしは麻里の手に触れた。

「どうして」

瞬間、コンクリートに座る麻里がうつむき気味につぶやいた。

「どうして……………いるの」

誰かに問うまでもなく、麻里は肩を震わせていた。

そりゃそうだろう。自分のしたくないことを強制的にさせられ、仕舞いには万引きという犯罪の域まで及んでしまう。どんな14才でも簡単に忘れたり捨て去ったりなんてできないだろうし、自分をこ

ここまで追い込んだ相手を受け入れるなんて普通すぐには無理だ。

わたしは考えた末黙ったまま唇を噛んでいる友永に、

「謝って」

強く鋭く言った。

「わたしも謝るから」

冷たいかつ優しい風が、ヒューという音で吹く。その吹かれた風はわたし、麻里、友永の、それぞれのボロボロになった心を羽毛で柔らかくふわりと包むようにしばらく囲み抱いた。

「ごめん……ごめんなさい」

友永の吐かれた息が鮮やかに白く彩られ、そのまま溶けた。頭を深く下げた友永の頭頂部のつむじはきりつとしている。

それでも麻里は、なお友永を恐れているように友永に背を向けるような形でいる。わたしは体を半回転させ、麻里と向かい合った。そんなわたしの行動に気づいたのか、麻里はゆっくりと、顔を上げた。涙を我慢している表情だった。あまりにも強く、そして弱い麻里を見ていると痛々しくてたまらない。

「ごめんね、麻里」

わたしは苦しくてもしつかりと麻里を見て言った。そして着ているコートを脱ぐと、麻里が着ている長袖のシャツと水色のセーターの上にそれを軽く重ねた。学校からそのまま走ってここまで来たから、着ていたコートは学校で指定されたタイプの黒い素っ気ない物だったけど、ものすごく麻里は見た目明るくなった。少なくとも、人間としての温かさは取りもどしたように思えた。

「わたし、麻里にいてほしい……ずっと、一緒にいたい」

麻里を、わたしはもう一度抱いた。

麻里の心臓の音が直接、伝わってくる。

とても、温かい。

そう感じた。

同時に、麻里の我慢していた目から……涙があふれ出た。たった一滴、たった一滴だけど、その中には今までの様々な思いが

ぎゅつと凝縮されているような気がした。この一滴が、麻里の心を締めていた複雑にからまるひもをほどいたように見えた。

本当の自分を全て表に出した麻里。

わたしは自分で自分を追い込んでいたいつしかの時の記憶を思い出しながら、泣きじゃくる麻里の背中をさすっていた。

最終章、大切なこと

その次の日友永はわたしに謝ってくれた。

そして、先生についた万引きの件の嘘についても、ぼくの勘違いでした、と否定してくれた。

「分かった、店の方にはわたしが伝えておく」

と、模範の生徒には必要以上に深く質問をしようとは思わないうい校長と教頭はそう言ったそうだ。かといってこれが万引き事件の終了、というわけではなくて、麻里は誰に説得されるまでもなく盗った消しゴムを手にし、デパートへ出向き謝った。

デパートの偉い役職らしき人は

「君がそう自分から告白してくるのを待っていたんですよ」

と、考えられないほどの優しさで許してくれ、

「けれど、君のしたことは犯罪です。絶対にしてはいけないことなんですよ」

そう最後に麻里に忠告したそうだ。

こうして半年間に及んだ様々な出来事は今、終わろうとしている。

一つの事を除いて。

そもそも、わたしが万引きの疑いをかけられたのも全て友永のせいだったわけで、わたしは友永が謝るのは当然だと思っていた。でも、友永が今まで麻里をいじめたりわたしが万引きをするところを見たど先生に嘘をついたりしたのも、後で知ったことだが友永には友永なりの事情があった。それを知ったとき、わたしはどうして悪いこととはこう連鎖してしまうのだらうと思った。

だいたい人に悪い事を平気でする子なんて家庭に何か問題があるものなのよ。

よくわたしのお母さんだって言うし、ドラマやニュースでも時々そういう言葉が出てくることはある。けれどそれは当たっているように友永の場合は当たっていなかった。

友永には……親がいなかったのだ。

「ちょっと、話があるんだ」

終業式が終わってすぐ、友永は体育館裏にわたしと麻里を呼び出した。というよりかはどちらかというと友永は麻里だけを目的としているようで、わたしはいわゆる仲介役のようなものだった。わたしにはそう思えた。その証拠に、麻里はさっきからずっとわたしを横目でちらちら見ている。わたしが体育館裏に行かないと言ったら麻里は自分もそう言おうと頭の中で準備しているのがバレバレだった。このままじゃいけない。そう少なくともわたし一人は感じていたけど、それでもしょうがないのかもしれない。麻里はまだまだ友永を信じきれていないのだから。

そのせいか、影で薄暗い体育館裏にいるわたしたち三人の位置はとてつもなく微妙だ。簡単に言えばトライアングルだ。でももう少し詳しく説明すると、わたしからの麻里と友永のそれぞれの距離はほぼ、というか全く同じで、わたしたち三人を線で結んだとしたら二等辺三角形と似た形になりそう。

気まずい。

沈黙が重い。

時計の針が奏でるチクタクの音。場をよりいっそう静寂で包むこの音すらなくて、ただただわたしたちの距離は緊張の白い糸をどこまでもどこまでも永遠と伸ばすばかりだ。

どうすれば正三角形にすることができるのだろうか。どうすればわたし、麻里、友永それぞれの距離を均一にし、固い固い何があっても切れない太い線分で結ぶことができるのだろうか。

考えるのは考えるのだけれど、その答えどこるかヒントですら浮かんでこない。

無駄に頭脳を回転させるよりかは、この硬直した空気を一気に裂くくらい的大声で日本語かどうか不明な発音で叫んだほうがよっぽ

ど賢い。でも、その力だけあればどうにかなる大声、というものが
出るほどの余裕は、震える喉には残念ながらない様子。
キンキンとした冷たい風が容赦なく体を刺す。

寒い、寒すぎる。

思わずポケットに手を突っ込んだ、その時。

「あ．．．．．」

麻里からもらったストラップの感触を、手が察知した。

わたしが初めて嬉し泣きした日。思い出すだけで、目頭が熱くなる。
完璧なくらい嬉しかった。あのとき、他の感情はどこにも一切な
かった。率直に感動し、胸が温かくなっていた。

「あ、あのさあっ」

勢いで言っていた。

麻里と友永が二等辺三角形の頂点であるわたしを見つめる。

「あの．．．．．さあ」

自分がこの後何を言おうとしているのか全く持って不明だった。

でも、不思議と自信はあった。

今までしょっちゅう行動と考えるの間でいた中途半端な自分が、この
ときは見え隠れしなかったのだ。

「麻里、これ、持ってる？」

わたしはケータイをポケットからぎこちない手で取り出し、それと
つながったストラップを親指と人差し指でつまんで見せた。すると
麻里は無言でうなずいて胸ポケットからそれを出した。

水晶が輝いている。

わたしは、深く呼吸し、

「買いに行かない？ 今から」
提案した。

「買うつて、何をだよ」

「何をつて．．．．．決まってるじゃん、このストラップだよ。
友永は知らないんだろうけど、実はこれ、すごいんだよ。麻里が買
ってきてくれたんだけどね、魔法がかかってるんだ。このストラッ

プを持っている限り二人は一生離れない。300円なんだよ。びっくりしない？ たった300円で、つながりあえるんだよ、ずっと。しかも実証済み。わたしと麻里が、このストラップがただものではないことは保障する。まあ、たった半年なんだけどね、わたしと麻里が壊れなかったのは。でもこれを買わない手はないって……

言ってる間、なんとなく、頬から耳の先まで赤くなっていくのが感じ取れた。

好きな男子に告白しているわけでもないのに秘密をばらされておどしているわけでもないのに大舞台で失敗して恥ずかしがっているわけでもないのに、顔がほんのり熱い。

「だからさあ、買いに行こう、麻里と友永のぶんも」
強引だと自分でも言ってると思った。

麻里にも友永にもお互い仲良くしあおうという気持ちはない、見たら分かる事だ。友永にはもしかしたら少しならあるかもしれないけど、麻里には皆無だ。当然といえば当然かもしれない。自分を死ぬ決意をするところまで追いつめたのだから、到底許せるはずもないましてや、おそろのキーホルダーを持つとうなど、思いもしないだろう。

わたしも友永に万引き犯と勝手に役決めされたことを所詮過去のことだと簡単に忘れられないし、麻里に精神的な苦痛を与えたこととはしてはいけないうことだ。わたしは友永を許してはいない。でも逆に言えば、だからこそわたしはそんな友永をこのまま放っていてはもっと大変な事が起こるような気がしてならなかった。優しさなのだろうか、これは。自分でもよく分からない。ただ、麻里にも友永にも今の状態のままで生きてほしくはない。引きずったまま、年を重ねてほしくない。それだけははっきりとした思いだった。

「渡辺、おれ、話すよ」
友永が口を開いた。

「そもそも、おれがここに呼んだんだし、まずは話すべきこと話し

て……そのうえで渡辺が良いって言うんだったら、おれは買ってもいいよ……魔法のキーホルダーってやつ？なんか女子っぽいけど」

思わずヤッターッと叫びそうになるくらい嬉しかった。

友永にとつて魔法のキーホルダーが女子っぽく見えたのをプラスしてでも充分すぎるくらい喜びと満足感が、心の水槽をあふれくらしいの温水で満たした。

初めてかもしれない、わたしが勇気を出して行動して、それが誰かの心を動かした。

「とりあえず話して」

友永が麻里とおそろのキーホルダーを買ってもいい、と発言したことに相当動揺したのか麻里は、自分の意見が正しいと思っていたのに周りはそれを批判していたからしょうがなく戸惑いながらも他人の意見に賛成した、そんな声のトーンで言った。

「おれ、親いないんだ」

友永は半分下を向きながらおもむろに言った。

わたしは「えっ」と心の中だけで叫んだ。

麻里も無表情で、友永を見ている。

本当に驚いたときほど、言葉と表情でそれをとっさに表現するのは難しいものなのだ。

「突然の報告ってやつ？実はおれ、今施設で育ってるんだ。もう十年になる。おれ、1才かそれくらいこのころに……そう、捨てられてさ。物心つくずっと前だったから、気がついたときにはもう施設が家、みたいな感じだったんだ。

最初のうちはなんとも思ってた。でも一年経って一っ年増えるたびに、だんだん思うようになってきた、おれは不幸なんだなあって。親に飽きられて……いらなくなつたがらくたみたい

に捨てられて。なんて不幸なんだろうって。幸い施設での生活は楽しかったけど、やっぱりいつも心は物足りなかった。小学校の入学式も運動会も授業参観も音楽発表会も卒業式

も全部、寂しくなる以外の何物でもなかった。その間、自分を見る人なんて一人もいなかったんだからさ。そりゃそうだよな。親は何だかんだ言って、自分の子を一番愛してる。他の子がどんな活躍をしていようと、記憶には残らないんだよ。で、おれはどんどん腐っていったわけ」

腐る、という表現が人間に対するものではないような気がして、わたしは身震いした。

自分には親がいない、という友永の話を聞いている間、わたしはずっと胸が痛んでいた。

「腐っていった。心が枯れていったんだよ。親がいないから、人よりも他人の幸せに敏感になっていった。人の笑顔を見るのが、だんだん嫌になってきてそのうち……妬むようになったんだ。

怖いだろ。おれ自身も怖かったからな。だからせめて、周りにはばれないように良い子っていうやつを演じてた。演じてる間は、ただただ夢中だった。自分を忘れられていた。でも、それも何度も試してるうちに効果が効かなくなってきた。演じてる間も、どこかに本当の自分があって、時々ふつと戻るんだ。そういうときに見る人の笑顔が何よりも、苦痛で嫌いだった」

わたしも嫌いだった。いじめられている間、わたしにない幸せを持つている人を嫌っていた。だからよく分かる。でも、わたしより友永のほうが苦しんできたことは明らかだった。そして今も、友永は一人で悩んでいる。

「おれ、人っていう同じ生き物の中でも、市村と渡辺は特別だった。最初は二人とも友達いなそうで、あ、おれと似てるって思ってた。でもそのうち市村がいじめられるようになって、ずっと前からいじめられてた渡辺が市村と仲良くなって、おれ戸惑った。このままじゃ誰とも共感できないって思うと怖かった。おれの苦しみを分かってくれる人がいなくなるなんて、考えただけで不安になった。

それで、なんでなんだろう……。おれ、市村と渡辺との間に壁を作りたくなったんだ。それで、渡辺に市村と縁を切れって脅し

て……。一度は二人とも仲が悪くなったように見えたけど、そのうち普通に話すようになって。おれ、あのときは混乱してたんだ。言い訳と思われてもいい。でも、いつのまにか自分の寂しさを紛らわす事以前に、どうやっても不幸にならない市村と渡辺自体が憎くなってきたんだ。

それで……。それで渡辺に万引きをするよう命令して。最初はおれのおれと思うとおりに動くことに快感を覚えていた。でもそのうち、どうせなら市村か渡辺のどちらかを万引き犯に仕立て上げようっていうものすごい悪い感情が生まれてきたんだ。もうおれ、このとき性格が変わってたんだ。で、市村が万引きをしたところを見たって、うそついたんだ。罪悪感の一つも心にはなかった……。そればかりかどんどん自分が崩壊していくことが怖くもおもしろくもあった」

どうしてだろう。友永の施設で育っているという告白を聞いてからのほうが、友永が憎くなってくる。自分を正当化しようとか必死な友永が今まで見てきた何かと重なり嫌になる。友永はわたしたちに許してもらうために自分の秘密を犠牲にしたのだろうか。だとしたらわたしは、もっと友永を許せなくなる。飾ってほしくなかった。

全部わたしのせいだって、言っただけ。もっと欲望的になってほしい。

今までずっと、一人で抱えてきた望み。でも何かすればするほどそれは遠ざかっていく。わたしは、いじめられていたのだ。なのにこのまま、普通になっていいのだろうか。

「でも今なら言える。おまえら二人には、何をしたらって許してもらえないくらいひどいことをした。改めて謝る、ごめん」

わたしの中で様々な迷いが生まれる中、友永はそう言いかけた。

パチンツッ！

でも最後まで友永が言い終わらないうちに、麻里の平手打ちが友永の頬を命中した。

激しい音。

肌と肌が衝突しあう、何とも言えない痛々しい音。

その音とともに、友永の首が九十度曲がった。

胸の奥から息がこみ上がってくる。

それでも友永を眺めていたら、しばらくして、友永はゆっくりと振り向いた。

途端、わたしの口は思わず半開きになった。

友永の左の頬が、赤くなっている。

「大丈夫？」と声をかけながら手で触ったら、こっちにまでヒリヒリとした電気ショックにかかった直後のような痛みが乗り移ってきそうだった。

でもなぜだかわたしは、心にずっと刺さり続けていた魚の骨が、ポロツと取れたようなこの世のものとは思えない気持ちよさを麻里の言葉と友永の頬から感じていた。その理由は、わたしが今まで気づきもしなかった、麻里が言うこの言葉で分かった。

「昨日からなんかモヤモヤしてた。やっと分かったよ、わたし。友永は謝ってばかりでわたしたちの気持ちを理解しようとしもない。一方的に頭下げて、どうにか許してもらおうとばかり。そういうのってね、バカの友永には分かんないだろうけど謝られてるほうからしたら一番嫌な行為なの。それに、謝る友永にとっても、何よりしちゃいけないことなのっ」

あまりの痛さに必死に涙をこらえている友永には悪いけど、わたしは正直これ以上の心地よさはないんじゃないかと思うくらいスカッとしていた。それに、愛のムチとは違うかもしれないけど、麻里の言葉は友永の一番の弱さをついていた。そのぶんこの平手打ちは何かしらこれからの友永のためになるんじゃないか、そういう予感があった。

「でも、ちよつとは共感してあげる」

麻里は急に穏やかな表情になった。

「香織はもう知ってると思うけど、わたしの家共働きなんだ。とい

っても生活に困っているからお母さんがしょうがなく、っていう感じで働いているんじゃないかって、二人とも好きでやってるの。

特にお母さんは忙しいみたいで、わたしと会えない日だってある。だからなのかなあ、わたし、昔から家事っていうやつけっこう頻繁にやってきたと思う。普通、親って勉強しなさいってうるさいもんじゃん。でも、家は違った。勉強するくらいなら家事覚えなさい、手伝いなさい。そればかり。といっても、わたしがやらなきゃ家はゴミ屋敷になっちゃうから、しょうがなかったんだけど。それにわたし一人っ子だから、平日は基本的に自分で晩御飯つくって一人で食べてる。寂しいなあって思うこともあったけどでも、慣れっていうのは怖いよねえ、今じゃこれが当たり前になってる。

……だからなんとなく分かるの。こんなちっぽけな悩みを抱えているわたしにおれの何が分かるんだよって友永は言いたくなるかもしれないけど、でもわたしはちよつとだけ分かってるつもり」

麻里も友永もそれぞれ別なものを背負っている。

わたしはどうだろう。二人に比べたら、まだまだ幸せといえるのだろうか。よく分からない。それに幸せってどういうものなのかもさえ、いまいちイメージがわからない。でも、一つだけ自信を持って言えるのは、たとえグリンピースみたいな微妙な嫌われ者で脇役の脇役のような存在でもいいから自分らしく、自分らしく生きていけばそれでいい。自分を無理に閉じこめずに、嫌なのに自分を変えたりなんてせずに、そうしていれば、いずれどうにかいい方向に向かう。この半年で、わたしなりに学んだことだ。

「友永のこと、分かっているつもりだよ」

麻里の言葉に、わたしは気づいた。

いつのまにか、麻里もわたしも友永を、友永もわたしと麻里を、それぞれ呼び捨てで呼ぶようになってる。しかも友永は自分のことをぼく、じゃなくておれと呼ぶようになってる。

半年。たった半年で変化するのが、この年代の特徴、だったりするのかもしれない。心の中で様々な大きさと色の波が止んだり揺れ交

わったり、を繰り返す。それを樂しめるかどうか。今までのわたしはあまりそれを受け入れようとしなかったけど、これから極力そんな自分と向き合っていきたい。それから、麻里とも友永とも正三角形を築いていけるようにしたい。

「といっても、誰かに自分の勝手な怒りや恨みをぶつけちゃいけないって思う。だって地球は丸いんだよ。自分がやったことは、一周してちゃんと自分に返ってくる。だからたぶん、誰かに悪いことをしている間は心が後ろに引っぱられるみたいに痛いんだよ」

麻里が照れ気味に言う。

さぞかし恥ずかしいんだろう。

わたしだって、こんなこと思っても二人の前じゃ言えない。友永はまだ痛そうに頬をさすっている。でも顔は笑っていた。わたしはといえば、正直半歩くらいしか進めていない。でもわたしはそれを、いつか大前進するための休息と見ることにする。

三人の靴の下をやわらかな冷気が通り過ぎる。

薄暗い体育館裏が日で照って、空気がふわりと軽くなった。

最終章、大切なこと（後書き）

「グリーンピース」を最後まで読んでくださり、
本当にありがとうございます。

改行が少なく、読みにくい部分もあったと思います。
そこは僕も反省しています。また、内容も分かりにくかったかもしれません。

それでもここまで読んでくださったあなたには、感謝してもしきれません。
本当にありがとうございます。

僕がこの小説で伝えなかったことは、正直漠然としている部分もあります。

ただ、これを書いたことによって、自分に甘くて精神的に弱い僕自身、
何かしら成長することができました。

読んでくださったあなたが、僕と同じように何かを感じてくれたら
幸いです。

ただ、香織、麻里、友永、それぞれの苦しみを書ききれなかったこと
が、残念です。

もう少し香織の視点ばかりではなく、2人の視点も描きたかったです。

しかし、今回小説を書いて学んだことは計り知れません。

そういう意味では、3人にはとても感謝しています。

執筆開始から約1ヶ月間、本当にありがとうございました。

またお会いできたら、そのときはまた、よろしくお願いします。

以上、春のやわらかな光が窓から差しこむ、小部屋からの後書きでした。

2008年3月24日 セン

4月4日の午前中まで、後書きにある登場人物の名前が間違っていました。

指摘してくださった方には、ほんとうに感謝しています。

また、間違いに気づいていても言いにくかった、という方は申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7398d/>

グリーンピース

2010年10月13日17時45分発行